

NICHE

寄



龕 NICHE

がん【龕】 ①仏像を納める厨子。②棺(ひつぎ) - 広辞苑 -

ニッチ【niche】 (㊟Nische)、がん(龕)とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所、彫像などを置く。 - 共立・建築辞典 -

niche (nich), n. [Fr.niche, from L.nidus.a nest] 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it - Webster's New Twentieth Century Dictionary -

ニッチ No.16 目次

- *この6年間のこと 〈南迫哲也〉…………… 1
- *建築学科の近況について 〈中嶋 泰〉…… 2
- *板橋 克氏に聞く
—先輩を訪ねて その7— …………… 3
- *都市デザインへの試み
〈岩藤一樹〉……………11
- *建築設備実験室の移り変わり
〈高信碩文〉……………21
- *同窓生ニュース……………26
- *第25期(1990年)一般会計報告……………29
- *第26期(1991年)一般会計予算……………30
- *同窓会運営委員……………31
- *同窓会誌(ニッチ)発行のための賛助金者……32
- *平成三年度建築学科卒業生名簿……………36

この6年間のこと

建築学科同窓会会長 南 迫 哲 也

同窓会長を辞するにあたって、いま思い出す二つの忘れ難いことがある。

一つは、ニッチの刊行が定期的に行われるようになったことである。編集担当の岩田・初田両氏の名コンビの努力の賜物と思われる、深く感謝すると共に敬意を表する。そして何よりもそれを可能にして下さったのが、会員諸氏の毎年のニッチ発行のための賛助金の納入であった。心より御礼を申し上げる。

二つ目は、新宿校地の開発問題であった。あえて問題と申し上げる、何故ならあまりにも問題が多過ぎたからである。

人間的な問題、社会的な問題など数限りない問題点が、相互に絡み合っ、ことを複雑化することになった。

事前にこれを察知し、紛れをなくそうという誠意が、SK研究会の発足を促した。

この開発に関しては、業者主導ですべてが行われ、学園の主体的な意向は無残にも無視されたといってもよい筈である。

したがってこの主体的意向を生かすために、評議員になっていた人々等何人かが、人生の貴重な日々を、その遂行のために更に大変な工夫と努力を強いられることになった。

この喜びと悲しみの日々の中に、創立百周年の募金、建築学科創設35周年事業などを実施し、これらに協力された会員の諸兄弟にはよくぞやって下さったと思う。ここに改めて深く感謝申し上げると共に次期の役員の方々にもこれに勝る御協力を切望して止まない。真に有難うございました。

同窓会の役員のうち8人は校友会の理事となりそのうち2人は常任理事として月1回の（有事には毎日の）会議をせざるをえなくなる。

これは通常勤務者では相当な無理をしないとこなせない業務である。学内勤務者の私でさえも無理のし通しであった。

しかしそれを支えて下さった、学内の教員の方々、会計の大塚毅、高信碩文、倉持道夫、名簿編集の宮澤健二、それに前にも触れたニッチ編集の初田亨の諸先生方に感謝すると共に、今後共よろしくお願い申し上げます。

学外からの絶えざる御協力を惜しまぬ、金尾武彦、小高鎮夫両氏の深い愛情によって、本会は成立しているといってもよいであろう。心から尊敬して止まない。永遠によき友が集う場であれかし……。

（昭和34年度）

建築学科の近況について

建築学科主任教授 中 嶋 泰

建築学科の主任教授を終えて感じたことを述べたいと思います。平成三年は内外ともに激動の年でありました。世界は湾岸戦争の終結からソ連邦の崩壊まで激震しました。日本では文字通り雲仙普賢岳からバブル経済の崩壊まで激震しその余波はまだ続いています。

本学科の動きについては、まず波多江教授、伊藤教授、白山特専教授の先生方が退任され、広部教授、広沢教授、渡辺客員教授、沢岡助教授の先生方が新任される予定です。昇格では、山崎先生と望月洵先生が教授になられます。また、都市デザインコースは2年目を迎え順調なすべり出しを見せております。平成四年度の受験生は昨年比で、建築学で892人も増える大幅な増加を見ています。このことは新コースを含め本建築学科についての社会的な評価が高くなっていることを示しているのではないかと考えております。今後共このように社会の要請に対して本学科の教職員が丸となり、努力を続けて行きたいと思っております。

社会的な活動ということでは、フランク・ロイド・ライトの作品である東京の自由学園の建物保存についての保存広告を南迫先生等が中心となってアメリカの新聞に載せたことや、本学科の修士課程1年生全員が共同でI・F・H・P(国際住宅都市計画会議)主催のコンペに、多摩ニュータウンを素材に応募し、入選したことなどもあります。

新大学棟に移って早くも3年目になりますが、建築学科については、25階と26階の中央にある学生ラウンジが大変、良い効果をあげていると思っております。この点については他学科の先生方からも高く評価されており、今後はさらにより積極的に利用を図るソフト的な計画、例えばフリートークの会とか、先生との懇談の会などの企画を行い、学科内のコミュニティ意識を増進するための空間にも利用していくことができたら良いと思っております。

今後の建築学科についての希望ということでは、各専門の先生方がいらっしゃる訳ですが、この専門をこえて共同で教育あるいは研究にあたること

ができれば素晴らしいことだと思っています。というのは、現代では専門家はその専門のことだけで生活できる時代ではなく全人間的な能力が要請されているのだと思います。専門家である前に市民としての能力・資格が最初に必要であるわけで、そのためにも専門分化した教育ではなく、専門を持ちつつできる限り総合化した教育を心がけたいと思っています。

また、本学が都心型大学であることの宿命かもしれませんが、都市が誕生、隆盛、衰退するというサイクルの中で都市建築を考え、再生についてもより注意を向けていく必要があるのではないかと思います。建築物自体は永遠不滅ということはありません、いつかは壊れていくものです。この前提をもって、良い部分を残しつつ新しいものを加えていくという考え方を育て、建築の教育研究を行っていくことが社会から切実に求められているのではないかと思います。

私自身のことに関連すれば、武蔵野市や立川市などの都市計画に関わって、このことを実践しようとしている訳ですが、これを進めて行くにはずいぶんと時間がかかることも事実です。またかけなければならないと思います。たとえば、吉祥寺駅前の再開発・都市計画なども計画から一応の完成には30年以上が経過しました。とにかく、建築学科においても、造ることとあわせて造り改えていくこと、古いものを大切に残しつつ新しくしていくことを重視した取り組みが必要だと思っております。

卒業生の皆様には大変お世話になっておりますが、今後共、建築学科を暖かく見守り続けていただけますようお願い致します。

板橋 克氏に聞く

—先輩を訪ねて その7—

聞く人 金尾、初田、岩田



初田(H) ちょうど今回でぼくらが編集して8回になるんです。工学院も間もなく創立100年、先輩にも優秀な方が多くおられますので、その方々から、いろいろお話をお伺いして、また後輩の励みにしようということで企画を始めたのです。金尾さんなどに御協力いただいて毎年1人ずつお話をお伺いしており、今回は板橋さんをお願いした次第です。

板橋(I) わたしは塗装業者ですから、建築関係の主体ではないもんですから、はたして私でいいのかと心配しております。

金尾(K) そんなことはありませんよ。今までの御体験を聞かせて頂ければありがたいです。

H 板橋さんお生まれは茨城の方でしたか。

I いやそれは私の母です。私の父は徳川幕府の直参だったんです。それがいろいろな関係で落魄しましてね。それでやはりこれからは技術じゃなきゃあだめだというようなことで塗装の技術を始めたわけです。

H お父さんは昔から江戸にお住まいで、江戸でお生まれになった……。

I そうです。

H 現在のお店を出されたのは先々代で、明治36年の猿楽町が最初ですね。

I 今は神保町なんですが、昔は表猿楽町と言ったの。今でも猿楽町ってありますが、店があったところは、表がついて表猿楽町と言ったんです。

H 明治36年といいますと、まだ板橋さんがお生まれになる前ですね。

I 私は40年生まれですから。場所は、ここではないんです。靖国通りに会社がありましてね。私もそこで、生まれたんす。あすこに昔の写真が

ありますよ。

K 今のいわゆる電車通りにあたる場所ですね。

I そうです。市電通ってましてね。早稲田から築地まで。日活館も近くにありました。大河内悦次郎とかがよく、出た時分です。

H 小学校もこのあたりですか。

I 小学校は地区からいきますとね、当然この近くの学校に上がるんですが小川町に小川小学校というのがあって、姉が五つ上なんですが行っていたのです。女学校だったのですが、私の入る時から、男も入れるようになったわけなんです。それで姉が行っているから一緒の方がいいだろうというんで、小川小学校に入ったんです。五つも違えますから、私が1年終わった時にむこうはやめ1年しか、一緒にならなかったんですが。

H その時お店は、今の靖国通りにあってお住まいはどちらにあったのですか。

I 同じ所にあったんです。もとは電車通り、今の日活館あたりですね。

H 小学校出られた後はどうされたんですか。

I 小川小学校を出ましてね。6年ですね。一橋高等小学校へ入ったんです。順序としてね。小学校を出て一橋に入ったわけです。1年半位やりましたね。1年と3期ですから、半年位ですかね。それでその時に問題になったんですよ。学校を続け、上の学校へゆくべきかどうかという問題が過程でおきましてね。当時は、あんまり上の学校へ行ったら勉強すると、「生意気になって、技術を覚えなくなるから、やめろ」というような意見も出たり、「いやそうじゃない。これからは勉強しなくちゃあいかん」というようなことがいろいろ議論されてましてね。父だの母だのそれから叔父なんかも

きましてガヤガヤやったんですよね。それで結局
工手学校に入ることになったんです。その当時は、
蔵前に高等工業があり、この近くに中央工学校と
いうのがありました。

K 中央工学校は今、田端へ行っちゃったですね。

I 築地の工手学校っていうのは優秀な先生方も
いるし、先輩もいるからその方がいいだろうとい
うようなことになったのですね。みんなの推めが
あったもんですから、それで9月から入学したん
です。

H 工手学校に入られたのは何年ですか。

K 卒業したのが大正12年の関東大震災の年の2
月ですから、その2年半前ですね。

H 予科には行かれなかったんですか。

I 予科に1年行って、それと本科に1年半で卒
業です。予科は昼間ありましてね。本科の方は夜
だったですね。ということで、まあ勉強したわけ
ですね。予科には遠藤先生ってヒゲの、数学の先
生がいましたね。非常に緻密な先生でね。「円周
率は707位あるけれども、そんなに覚えなくても
いいから20位まで覚えろ」と言われてましてね。

K 20位、大変ですね。

I 「20位まで覚えろ」と言うんでしょうがない
なあんて3コンマ141……これは頭にしみこんじ
ゃった。同じこと今でも書けますよ。今だに忘れ
ないんです。本科の専門の先生で覚えているのは
大沢三之助さんね。この方は非常に品のいい方
で、アーキテクト、ヒストリー、西洋建築史です
ね。英語で読まれて、それを翻訳して教えられ
たんです。とても重厚な方でしたね。

H 授業を英語でやられたんですか。



I ええ、英語でしたね。

H 英語で行ない、その場でもって訳されたんで

すか。

I そうなんです。小島さんっていう先生もいま
したね。日本建築の先生でね。大蔵省営繕管財局
に勤めておられた先生です。この先生がお酒が好
きでね、いい顔して出てこられて、時々休むん
ですよ。休んで結構だなんてんでみんな遊びにい
っちゃったりなんかしたのを覚えています。

K 学校は夜でしょ。そうすると測量の時間なん
ていうのは日曜に行なったのですか？

I 日曜日かな、夜できないですから、昼間や
ったのは覚えています。

H 工手学校は、夜ですけど、昼間は何をされ
てたわけですか。

I 昼間はね、予科の時は午前中は暇があるわ
けですよ。小説、円本っていう本がありましたよ
ね、1円の本でした。宇宙とかプロントサウル
スとゲイアントサウルスなんて爬虫類に興味を持
って本を読んでいました。あの当時はアインシュ
タインの相対性理論というのが話題になりました。
これも随分勉強したんですけど、結局わからな
かった。むずかしいですよ。アインシュタインの相
対性理論は。

H ご自分で勉強されたんですか。

I 自分でしました。

H 予科というのはお昼からなんですか。

I そうです。

H お昼から何時位までですか。

I えーと1時位から5時頃だったんですかな。

H 予科に1年間通われて、それから本科に進む
わけですね。

I ええ、そうです。

H 本科の方の授業は夜ですね。

I ええ、夜です。

H 予科の時は午前中は、御自分で勉強されてた。
本科の場合は、昼間勤めておられないので、自由
な時間が長いですね。その時は何をされていたん
ですか。

I 暇があるもんですから、水泳なんかやりました
ね。神田のYMCAにプールがありましてね。これ
から水泳習っておかないといけないというんで
習いました。プールを何十回か往復して……。元
気だったんですね、あの頃は。まだ若いですから。

K おうちのお手伝いはしなかったんですか。

I やらないです。予科の時も本科の時もやら
なかったです。

H 当時、学生には昼間勤めている人も多くいたと思うんですけども……。

I ええおりました。同窓の中で大体同じ位の年配の若い連中が15～6人いましたね。15～6歳ですかね。昼間遊んでいるもんだから早く行くと若い連中がずっと教室の前へ陣どっちゃってね、あとからくる人は後の方に座るという状態でした。年令の差が相当あるんですよ。別に制限がないですから。だから5歳位違った人、10歳位違った人もいましたね。

H そうすると板橋さんなんかは若い方ですか。

I そうなんです。一番若手の方だったです。

K お見うけしたところ、ひとクラスの学生は大勢いたようですね。

I 大勢いたですね。何人いたのかな。

K 4～50人はいたようですよ。

I いやもっといたんじゃないですかね。とにかく名前を呼ぶとね、ずい分時間がかかりました。今はもう亡くなったり転居したり、音信不通になったりしている人が多いですね。我々のような85歳まで生きてるとね。みんな早く死んでしまっただけで、もう本当に心細くなってるんです。

H あの当時、板橋さんみたいに昼間勤めない人と、勤めていた人との比率はどの位だったのですか。

I 勤めていた人の方が多いですね。我々、若い連中は部屋住みですから、早くから行って勉強していたわけです。学校の勉強……。勤めていた人というのは、役所にいたり、会社にいたり設計事務所にいたり、まあいろいろだったですね。現場の手伝いをしている方もあるでしょうし、もう様々だったですね、職業は。

H 欠席する人はどの位いたんですか。

I いや、ほとんど出席していましたね。あの頃は今の学生と違いますね。みんな真剣ですよ。とにかく昼間勤めて、とにかく夜勉強してなんとかしようという熱意がありますから、みなさん熱心でしたよ。なりふりかまわないでね。本当に一生懸命出てきたですね。

H 工手学校の建築を選ばれたというのは、お父さんが塗装の会社を出されていたからですか。

I そうです。建築に関係あるだろうということで。塗装も建築の中の一部ですから、まあなにか関連があるだろうということで、それで建築ということになったわけです。

H お父さんが、会社設立されたのは明治36年でしたね。かなりはやい時代なんですけど、お父さんはどこでペンキの技術というのを覚えたんですか。

I 今の田村町っていうのがありますね。日石のある。あすこの裏に高橋塗装店という、有名な塗装屋さんがありましてね。高橋熊五郎という人のお店です。妻木博士の非常に強いごひいきがありましてね。

H 妻木頼黄さんは、官庁でとても大きな力のあった人ですね。工手学校にも関わっておられた人です。妻木さんが、ワニスを発明されたんです。スーパーワニスという。あの当時は現在のようなクリアラックなんかないですから。ワニスは雨にあたるとき裂ができてダメになっちゃうんです。それで雨にあたっても強いワニスということですね、妻木博士が発明されたのが有名な妻木式ワニスって呼んで、あの当時相当権威があったんです。

K 妻木先生は工手学校で授業は持っていなかったんですか。

I 授業はどうか。主事か何かをされていましたがね。

I 高橋熊五郎というその店主が、妻木さんのごひいきに預かって、いろいろ役所の仕事をしておられた。父はその高橋塗装店で塗装の技術を習ったわけです。とにかくあの当時父は、朝お弁当を2つ持って田村町まで通ったんです。

K 塗装の塾かなんかですか？

I 塾じゃなくて、塗装店なんです。私の父が前に勤めていた店です。父が独立した後も忙しい時は応援に行ったりしてたわけですね。まだ東京駅がない時分で、あすこに草っ原がはえてバッタがたくさんいた時代です。それで朝、弁当を暗いうちにもって夜帰ってきたわけです。あの当時は働いたもんなんです。今は9時から4時だ5時だなんてね、もう半日位しか働かないのと違うんですね。とにかく朝、暗いうちに弁当2こ持って出たっていうことを父がよく言っていました。

H 大正12年に板橋さんが工手学校卒業されますね。そのあとはお父さんと一緒にお店で働かれたのですか。

I ええ大正12年の2月に卒業して、9月1日が関東大震災ですから、卒業すると同時にペアになっちゃったんですね。もうすっかり。店はその前にもう1回焼けているんです。ここで。三崎町か

ら、火事が出ましてね、それで昔は火事だと太鼓をたたいてね、ドンドンと、火の番がまわってくるんです。「火事は三崎町！」という「又、三崎町だ」なんて。神田橋からこの辺にかけて一円に燃えたんです。その時私は7つ位で、まだ、小学校にあがる前でね。自分の焼けるうちを見てふるえてたんです。それが1回目。関東大震災で2回目。それから戦災で3回目と。3回目に20年の4月13日に焼夷弾、爆弾でね。もう3回目でおしまいにしてもらいたいと思っています。



H お店はそうすると卒業された後はすぐお父さんのお手伝いをされたのですね。

H 卒業して、震災までの半年間。親父の手伝いをしながらね、やはり覚えなきゃあいかんわけですから、一緒に手伝って仕事をしました。自分でペンキを塗ることもしました。

H 当時の仕事というのは、具体的にはどういう仕事ですか。

I 今のような洋館のような構造じゃなかったんですね。日本式の建物が多かったですから。あまりペンキ塗るなんて仕事はなかったんですね。

H どういうところを塗ったのですか。

I この辺は本屋さんとか、洋服屋さんとかお店が多いですね。

H お店の看板ですか、それとも外壁なんかを塗ったのですか。

I 町仕事をやっていたんですが、場所柄看板が多くくるんですよ。角に立てる棒塗りとかね。それから屋根の看板や建物前面の看板ですね。まあ塗装しながら看板もやるということで、塗装看板店という名前ができたわけ。

H 看板の他に塗装というのは、具体的にはどういう部分を塗るのでしょうか。

I それはたいしたことないですよ。大体、塗装ペンキ塗る前は、渋だったんですね。渋屋さんだったんです。黒渋。ですから塗装屋の半てんの下には三角じょうの印がついてましたね。あれ渋っていう字の略字なのね。渋はんとかね、渋ギンとかね。そういう名前の渋屋さんだったのね。それが明治の初めにペンキってものが出てきたわけです。ですからペンキの塗るところは非常に少なかったですね。

H どういう所を塗るんですか？ 普通の家のどの辺を塗ってたんでしょう。

I 天井だとか、壁だとかですわね……。

H 建物の内部ですか？

I ええ、ええ内部ですね。今みたいな外壁の吹きつけなんてなかったです。

H 洋館はあまりなかったと思うんですけど。

I ないです。洋館というのは。

H そうすると、伝統的な建築だと内部のどのあたりを塗るんですか。

I 内部を塗るのは学校位なものですよ。

H そうしますと、仕事としてはお店の看板とかそういうものが多かった。

I 多かったですね。例えば看板なんか塗る時に、八百屋さんですと何々八百屋と字書いただけじゃなくて、いろいろむこうから注文が出してね、こっちで適当に看板をデザインして、見せてそれで「これでいいですか？」ってなもので仕事をしてました。

H スケッチみたいな略図なんかを描いたのですか。

I むずかしいことじゃなくて、こんなかっこでこうして、こうなってというようなことで、結局、こっちがデザインしてお目にかける方法でした。今みたいな設計業者がやるようなのではなくて、結構間に合ったです。

H そうすると多くの仕事は看板が多かったわけですか。

I 看板が多くなってきましたね。

H 学校とか、何か特別な洋風建物の仕事もされましたか。

I 店の場所がらからいって官公庁の仕事をするような所ではないんですね。また、店も持ちたてということで、町仕事がほとんどでした。

H 町仕事ではほかに、どういう仕事があるのでしょうか。

I 内装の天井が汚れたとかです。……

H お店の内装というと、どの部分を塗るのですか。

I まあ、洋服屋さんならね、天井から壁の漆喰が汚れたとか、あと銀行とですね。そういうような所は2~3年もたつとタバコで汚れます。まあ洋館というと、官公庁とか銀行とか数える程しかなかったですね。内装の外にサッシュだとかも塗りましたね。普通の家の外部はあの当時下見板でろくすっぽ塗らないですね。洗でも塗ればいくらかもつんでしょうけれども。

H で、看板の仕事がだんだんふえてきて……。

I ふえてきたんです。

H 卒業してから、半年後に震災がありましたね。ペンキ屋さんにとって震災でかわったことということはあるですか？

I そで看板というか、道路をまたいでやるようなのが大分はやった時代がありました。

H でもそれ程多くないですよ。道路をまたげるところっていうのは。

I ええ、これは警察の許可をもらってつくるんですよ。今はあまりないですね。30cm位の柱でつくりました。キャラコで組みどめして、それに水性の絵の具で字を書いたり絵を書いたりして、大売りなんかに出すんですね。何かそんなのをやった時代がありましたね。

H それは震災後ですか？



I 震災後ですね。それにウィンドーとネオンサインですね。あすこの三省堂の筋にゴシャ堂というアメリカ屋の本屋がありましたね。そこで売っている『サイン』という本に出てたんですよ。東京にはネオンサインはあまりなかったんですね。それで調べて、今後かなり普及するだろうと思ひ、

ネオンサインなんかもやりました。

H 塗装だけじゃなくネオンサインの仕事も行なったのですか。

I 看板をやったり塗装やったり……。

H ネオンサインの塗装をやったり。

I いや、ネオンサインのわくをこしらえましてね。ネオンサインを取り付けるところの部分の仕事ですね。

K ネオンサインは電気屋さんがやるんでしょ？

I 電気屋さんが行ないます。それでネオンは別にこしらえるところを見つけまして。あの当時あまりなかったですけどね。しょっ中故障ばかりしてついたかと思うと消えたりなんかしてずい分苦労したことがありました。そんなのが一時はやったことがありました。

H そういふのは板橋さんが一式請け負われて、それでネオンサインの所だけは、下請け工事を頼んだかたちになるわけですね。

I ええネオンサイン屋に頼んでね。まげた字をこっちが書いて、それでこしらえて下さいというのです。看板の字をこっちが字をこしらえて、それにあてはめてやったということもありました。

H そうすると震災後というものは看板がわりと多くなった……。

I 震災後はね。看板部を置きましてね、塗装と看板部と2つにしてやったんです。当時は小僧さんというのが多勢いましてね。それで塗装は塗装で行なったのです。看板部の方は頭の毛を長くしたような人で、字書いたり絵書いたりするような芸術家がいるわけですよ。わくをこしらえて、キャラコをはって、それでそういう人に字を書いたり絵を書いたりしてもらってつくったのです。何人かそういう専門職を探してね、結構きたですよ。

H そうすると看板なら看板の仕事を請け負われてそれをどなたか髪を長くしたりした芸術家肌というかそういうのをデザインしたりするのが好きな人に仕事をお願いして、完成までを見届ける管理をするということなんですか。

I そう、そう。そういうわけですね。

H バラック装飾社というのが当時あったと思うのですが。

I バラック？

H 今和次郎さんなんか、バラック装飾社を作って建物のペンキ塗を、いろいろデザインしてやったという話が本に残っていますが……。

I わからないですね。あの当時は水性塗料でやったんですね、そういった装飾は。何年ももたせるというものじゃなく期間がひと月とか、ふた月とか警察で許可をもらってやるんですから、そんなに長いこといららないんです。ですから水性塗料で間に合ったんです。

H 髪を長くしたような人で、そういったデザインをやる人というのは、当時、相当いたんでしょうか。

I そうね、そんなにたくさんはいなかったですね。

H おもにどんな……どんなと言ってもなかなかわからないと思うんですけども、例えばどういう所にそう人は住んでたんでしょうか。

I どういう所って……。

H どこか学校とかを卒業されてそういう仕事を始められたのか、絵が好きではじめたとか。

I まあそんなのは見よう見真似ですね。

H 画家がそういう仕事を始めたのでしょうか。それとも他に……。

I 映画館の看板がありますよね。ああいうようなものを書いたりしていた人もいますからね。そういう人から覚えたとかね、そういう人もいましたね。

H 震災後は、そういったデザインに興味をもった人たちが進出してくるような場というのは多かったんでしょうか？

I そうですね。震災後は非常に多かったです。その後、時代がだんだんかわってきましてね。もう看板なんかやっているんじゃないで、今度は軍需工場もね。塗装もしなくちゃならないようなことになってきまして、看板の仕事もなくなってきたわけです。普通の建物もね、昔風の庇ののっぺらなものじゃなくて下から上までずーとのっぺらなものが多くなって、浮き出しの金文字で屋号を書いたりしました。昔の看板なんかはなくなってきたんです。

H そうするとデザインにもアイデアを要求されてくると思うんですけど、そういうのは板橋さんとかが行なったのですか。

I 建物の様式がのっぺらぼうになってきましたんで、そういうのは、大体、看板じゃなくて金文字みたいなものが多かったですね。

H 文字を取り付けてゆくわけですか。

I ええ、取り付けです。木を切りぬいて漆を塗

って、金箔をして、それで金文字っていうのはできているわけですから。

H そういう仕事もされたわけですか。

I ええ、そういうのも下請けがありましてね、頼んで字書きにちゃんと文字を書いてね「こういう風にやりますよ」と見せて、それで一尺角だとか、一尺五寸角で何々屋ということで原稿をこしらえる。こっちが書くわけです。書いて金文字屋に渡すんです。そうするとむこうは木にそれを切りぬいてつくってくれるので、それを取り付けるわけです。

H その頃の塗装というのは室内の仕事が多いですか？

I 塗装という仕事がふえたのは、軍需工場の、ようするに、飛行場の鉄骨を塗るとかいうことですね。時代も軍事色一色になってきて、そういう仕事を受注しましてね。それで統制会に鉄骨なら鉄骨を何㎡いるとちゃんと計算してこれで何キロの塗料がいるというようなことで申請書を出しますと、陸軍と海軍とでそれぞれ塗料を査定してね、切符をくれるんだ。それがないと仕事ができないんです。仕事がね。とにかく自由売買じゃないですから。塗料が重要物資に制限されたんです。ですから、軍かなんかの関係でないとう仕事ができなくなってきたのです。

K ペンキ屋がだんだんなくなるのは、満洲事変後ですか？

I 満洲事変後ですね。あの当時は、オイルペンキは、大体大豆でしたね、あれが満洲からきていたわけです。それを釜で煮て、亜鉛化をませて、ねったものがペンキなんです、その原料がなくなっちゃったんですね。戦後は一時、魚の油でつくりました。クジラのあぶら、いわしのあぶらを、買いあさってつくりました。それで北海道へクジラのあぶらを買に行ったり、いわしを買に行ったりもしていました。現金持って買い付けてくる。それでペンキこしらえてましたから、あの当時のペンキのくさいこと。くさいこと。塗ってあるものは目から涙がでるようなくささでしたね。それで進駐軍というのはまだとにかく塗ることが好きなんで、日本の天井から床の間から……。

H 戦前の話に又、もどし申し訳ないんですけど、関東大震災をはきんで、看板の仕事が一時ふえてきたけれども、その後又看板の仕事がへってきて、次は軍事工場の仕事かふえてきた。その頃

で、看板の方は、もうやめられたというわけですね。その後いわゆるペンキもなかなか手に入らない統制の時代がきますね。さらに戦後にはクジラのあぶらとかいわしのあぶらを買って御自分でペンキを作られたのですね。

I そうです。ヤミのね。米軍の方はなんでも「塗れ塗れ」って言うだけなんですけど、原料がない。それはもう戦後ですね。

H 戦前もクジラのあぶらとかいわしのあぶらとかを買ってペンキを作ったことはあったのですか。

I それはね、なかった。

昭和19年位から塗料統制会というのができてね。これは白木屋の上にメーカーの連中が、百何十人か集まって塗料の販売業者から製造業者を合併させたんです。そういう時代があったんです。やはり品物がないから、そういう合併の時代があったんです。自分ではつくらなかつたけれど、統制会では魚のあぶらでつくっていたね。

K 大東亜戦争がはじまる頃は塗料もあったんですね？

I まあ、あの頃はね。支那事変が昭和7年にありましたね。ある頃はやっぱり軍の仕事であのまほ兵舎の屋根を塗るとかの仕事があった。相当窮屈だったですけど、軍の配給やなんかをもらってやりましたね。もう一つおもしろいのはね、昭和19年荻窪に中島飛行機がありましてね、軍の命令でね、とにかく1日か2日で「迷彩塗料しろ」という命令が出ましてね。警視庁の4階の会議室へね、労報のトップみんなを集めるです。「どここの中島飛行機の建物を2日間で迷彩にしろ」という命令が出たんです。それで2日間でやるために11月19日に1600人動員して行ないました。1600人集まったんです。荻窪の駅にさげつぼとハケを持って。塗料はないですから。ドラム缶からコルターを引っぱり出して、あたためてドロドロのやつを屋根ののって塗ったんです。建物はすぐに標的になってこわされちゃいましたけどね。そういうのがあるんです。田村町の三井物産なんか御影石にコルターを塗ったんです。

K 御影石でしたね。三井物産は。

I それから海軍省のね、あすこの今の警視庁の裏の赤れんがの海軍省ね、あの辺の建物も「塗りなさい」と命令が出ました。

H 先程、関東大震災をはさんで、お仕事がどう

いうふうにかわったかをお伺いしたわけですけど、今度は戦争をはさんでですね、戦前と戦後で大きくかわった所というのはどんな所ですか？

I 軍がなくなっちゃったですから、米軍一色になったわけです。

H 昭和25年、30年頃まででしょうか。米軍一色になったのは。

I 米軍は30年頃までですね。

H その後はまた、民間の仕事が多くなってきたのですか。

I そうですね。民間でビルを建てるようになってきましたからね。

H ビルの内装工事などで、ペンキを塗られたわけですか。

I ええ。大分仕事がふえてきましたね。それから外装の吹き付けの仕事も出てきた。吹き付けも塗装の仲間ですから。

H そうですね。

H 戦前は、吹き付けは、ほとんどなかったのですか。

I 戦前はほとんどなかったですね。それから、近年また仕事が変わってきましたね。要するに現場でやる仕事は手間が高いということでどんどん内装が変わってきております。間仕切りで、今までボードだったのが鉄板の吹き付けになってくるとか、ガラスの仕事がふえたり、タイルがふえたりね。新建材がどんどんでてきたんで外部の吹き付け工事も少なくなって今きているんです。現場で塗るところが少なくなってきた。現場へ行っても、どこを塗ったんだと探さないと見つからない状態です。この前、新宿の都庁舎の工事をやりましたが、見に行くと、どこを塗ったんだろうと本当に探さないと見つからない位です。だんだんと仕事が変わって、壁がクロス張りになったりね。ペンキ塗るのは学校位のもんで、たいがいクロス張りになったね壁は。おもては、タイルになったりガラスになったり、吹き付けもだんだん少なくなってきている。というようなことで、リフォーム仕事が多くなって、新築工事がだんだん減ってきているのも最近の傾向です。塗装工事のリフォームの方は逆にふえてゆく。今45対55位でリフォームの方が多くなってきている。

H 会社の経歴書を見せて頂きますと、現在は株式会社IP21となっていますね。昔は板橋塗装工業株式会社ですね。

I それは先月の1日からかわったんです。

H この経歴書を拝見していますと、先程都庁やられたというお話がでたんですけど、工学院大学の工事にも関わっているのですね。

I やったです。ほかにもずいぶん仕事をさせてもらってます。千代田区からくると、経団連会館、日本開発銀行、それから日本銀行の新館、大正海上。それから、帝国ホテル、日本石油、竹橋ビルとかね。むこう行って貿易センタービルもしましたね。ずっと移って、草月会館、渋谷の東邦生命もやりましたね。それから池袋のサンシャインもやりました。目ぬきの所は全部やっかいになったんです。

K 何しろ鹿島さんの代表の塗装業者さんをなされていたから。

I いやいや。

K 鹿島さんの大きいのはいつ頃から関わられたのですか。

I 大きな仕事では霞が関ビルが最初なんです。

H 霞が関ビルもペンキを担当されたということですか。

I そうです。それから早稲田大学の建物も塗り替えから新築まで必ず行ないました。私の52年叙勲の時に司会をやってくれたのが早稲田大学の施設部長さんでした。



H 会社が大きくなるのびた時というのはいつ頃なんですか。

I 資本の動きをみると49年11月に資本金4800万円増資であと、その後出ているのは、平成元年3月に資本金1億1千万円。49年頃に相当大きくなった。配当をして1割なんぼかの配当を出して、それを資本金に繰り上げて、だんだんふやして4800万にしたわけです。払い込みとかじゃなくて、配

当を振替え、資本金をふやしていったのです。

岩田(IW) 板橋さんは塗装という面から建築の方にかかわってこられたわけですけど、そういう観点から、これから建築をやってゆく若い人々に、何かアドバイスというか、伝えたいことありましたら。

I もう少し塗装のことを知ってほしいということですね。一級建築士の人でもあまり知らないんですよ。塗料が一体何んでできているのか、などについて。

IW 塗装の仕事をやっている、良い建物、悪い建物っていうのはありましたか。たとえば、塗装工事をしながら、これは仕事がやりやすくていい建物だとかといったことが。

I それはありますね。ゼネコンさんの腕でね、非常に緻密な仕事される方と、荒っぽい仕事する方がおられます。荒っぽいのは目地がすいていたり。そういう建物は余計手間がかかって汚ない仕事になりますね。

H 今日はお忙しい中をどうもありがとうございます。建築も分野が広く、それぞれの分野で多くの卒業生が活躍されていることを知り大変勉強になりました。

略 歴

明治42年2月13日千代田区神田神保町で生れる

現在85才

大正12年3月築地工手学校建築科卒業

昭和7年3月日本大学経済学部卒業

大正12年9月板橋塗装店に塗装見習工として入店

昭和7年10月父死亡により板橋塗装店を継承

昭和13年2月板橋塗装店を株式会社に改組

昭和23年4月日本塗装工業会副会長

昭和29年5月 同 会長

昭和33年 同 常任相談役

昭和33年4月工学院大学校友会千代田区支部長

昭和38年 黄綬褒章

昭和52年 勲四等瑞宝章

平成3年10月板橋塗装工業株式会社をアイピー21に社名変更

聞き手 金尾 武彦(昭和14年卒業)

初田 亨(昭和44年卒業)

岩田 俊二(昭和46年卒業)

平成3年11月20日 (株)アイピー21にて収録

都市デザインへの試み

地域計画総合研究所 岩 藤 一 樹

はじめに

潤いのあるまちづくりや個性的な都市景観の形成、あるいはアメニティ等の言葉が、雑誌や新聞紙上を賑わせ、まちづくりや建築に関わる人ばかりでなく一般の人々においても関心事となってきた。

工学院大学においても平成3年度から、新たに都市・建築デザインコースが設けられることになったと聞いております。

今日、都市デザインが都市計画の主要な課題の一つとなっており、新たに設けられた都市・建築デザインコースの設立は、極めて時機を得たものであるとともに、都市計画行政やまちづくりに大きく貢献してくれるものと期待しています。

本研究所を設立したのが今から14年程前であるが、この間、調査・計画内容も大きく変わり、今日、大都市圏での住宅供給計画や詳細な土地運用計画とともに、都市景観整備計画等が当研究所の主要な業務となっている。

ここでは、近年、当研究所が関わった暮張新都心住宅地デザイン計画や栃木県栃木市巴川ふるさと景観整備計画（第1回てづくり郷土賞受賞・建設省）、けやき並木の美しい杉並区阿佐ヶ谷駅前地区景観整備計画等から、都市デザインについての試論を述べることにする。

なお、本原稿は自治省の「自治時報・平成3年5月、7月号」を加筆修正したものである。

1. 都市デザイン・都市景観行政の系譜

（都市景観行政の始動）

潤いのあるまちづくりや都市の景観形成等の言葉が、都市計画やまちづくりの俎上に上ってきたのは、都市デザイン活動の先進地であった横浜市が昭和46年、都市デザイン担当セクションを設け、相次いで成果を取めたことがその始まりであった。

それから約7年程遅れること、昭和53年に神戸市において都市景観条例が制定され、更に、55年

の都市計画法の改正により地区計画制度が創設され、建築の形態・意匠等を含む詳細な計画が都市計画に位置付けられることによって都市デザインがまちづくりの柱の一つとなった。

高度成長期においては、急激な都市化・開発に際して歴史的・伝統的景観を「保全」するための条例が各地域で盛に制定された。経済成長も一応の落ち着きをみせるに伴って都市間、あるいは地域間の人口移動も鎮静化し、地方都市での人口の定着が進むとともに、地方都市においても魅力あるまちづくりが大きな課題となり、横浜市のアーバンデザイン活動を先駆けとする「都市景観整備・誘導」の時代と移行してきた。

昭和60年代に入ると各自治体で急速に景観に関する条例が制定され、市町村レベルだけではなく県レベルにおいても制定されるようになった。

一方、今日、別な視点から景観をまちづくりに活用する例もみられる。

その代表的なものとして、昭和43年にスタートした妻籠宿の保存活動や昭和45年から始まった湯布院町のまちづくり活動である。妻籠宿の保存は、過疎化による地域の維持形成・地域の活性化のために生み出されたまちづくり活動である。昭和43年から始まった保存活動は、48年に妻籠宿保存条例を制定し、また、50年には重要伝統的建造群の指定を受け、観光振興と併せて妻籠宿まちづくり活動は他の地域の先駆者として成功を収めた。

一方、湯布院町のまちづくり活動は、昭和45年にゴルフ場開発に対して郷土の自然保護を守りつつ、独自の産業展開による地域の自活を目指し、自分達の手によるまちづくり活動が展開された。更に、昭和50年から始まったクラシックの夕べや映画祭等も今や全国的に名声を馳せ、3～12月には多くの人々を集めている。

また、三州足助屋敷と有名な愛知県足助町は、昭和56年の農水省の「緑の村農業構造改善事業」の導入を契機とし、生業の保全・活用、あるいは1次産業の高度化等を目的に、老人によるまちづ

くり事業が展開された事例である。

こうした地域の活性化とは別に、昭和61年から始められた栃木県における「誇れるまちづくり事業」は、地域住民にとって地域としての誇りの発見・増長・付与を目的として、現在の補助事業による都市施設等の整備を嵩上げするための総合補助的な事業を創設し、年間5自治体を対象にまちづくり事業を展開している。こうした例は、国土庁の花と緑の都市モデル地区整備事業や自治省の定住圏構想・地域推進行動事業をはじめ、各省庁毎に多くのモデル事業等があり、都市景観整備に関する事業の枚挙にいとまがない程あり、今日のまちづくりの主要な柱となっている。

（都市景観の法的担保）

特に、昭和63年の都市再開発法・建築基準法の一部改定による再開発地区計画制度の中では、美観創出や歴史的建築物の保全を推進するための見返りとして容積緩和をうたい込む等、都市デザインが法的に担保され、都市デザイン・都市設計がまちづくりの中で認知されたといえる。

しかし、制度を活用するためには、“優れた都市デザイン”とは、“歴史的建築物の保全”とは、等に関する経験をもうすこし積む必要がある。

（戦前などにおける都市景観行政）

我が国における都市デザインは、横浜市を先駆けとする昭和46年から50年以上も前の大正8年をスタートとすることができよう。この年、旧都市計画法、市街地建築物法が制定され、旧都市計画法のなかに風致地区が、市街地建築物法のなかに美観地区が創設された。最初の風致地区の指定は、昭和4年京都市でなされ、美観地区の指定は昭和8年に東京の皇居外郭一体が初めて指定された。翌9年大阪市の御堂筋、中之島が指定された。

また、大正14年には都市美化についての啓蒙宣伝と事業研究を行なう団体として「都市美化協会」が設立され、昭和3年に皇居外濠の風致保存建議、同15年には電柱整理・河川浄化・煤煙防止に関する建議が行なわれている。

しかし、こうした運動も軍国化の流れの中で戦前の都市美化運動も終焉を告げることになった。

戦後、我が国は戦災復興と急激な都市化に対応するための都市基盤整備に重点が置かれ、都市の美観に関する議論は、昭和40年代迄待たなければならなかった。

まだ私が学生時代であった昭和40年、皇居お堀

り端における高層ビル建設に関する美観論争が起り、都市審議会などで議論が闘わされた。また、この1年前に京都タワーの建設をきっかけとして古都景観の保全と開発をめぐる論争が社会的関心を集めたことを昨日のこのように覚えている。

こうした社会的動きを背景に、昭和41年古都保存法が制定され、43年金沢市伝統環境保存条例、47年京都市市街地景観条例が制定された。

戦前からの都市美観に関する系譜をみてきたように、都市デザインは横浜市等で展開された昭和40年代中葉以降とそれ以前では、大きな違いを見出す。

明治、大正、戦前における都市デザイン思想は、帝都としての顔づくり・住民不在の都市の美観形成であったと言える。しかし、今日、都市の歴史的資産は、この当時のものが多く、この時代の都市設計・建築思想、手法をもう一度見直すことが必要である。

（これからの都市計画テーマ）

こうした都市デザインの流れを都市計画の目標・手法のなかで整理すると、東京大学・森村道美氏は次のように述べている。

昭和35年から45年にかけての1960年代は、産業構造の急速な変化に伴う都市の急激な成長拡大の時代であり、この時期の計画は、基幹施設・産業施設整備重視、フロー対策中心の「需要対応型」計画であるとしている。

昭和45年から昭和55年の1970年代の計画は、環境問題に関する熱い議論が交わされた時期であり、過疎と過密の問題、公害問題、マンション紛争、交通戦争、ごみ戦争など、高度成長期により諸弊害が顕在化した。こうした社会的状況を背景として、その矛盾の解決を主目的として、この時代の計画を「問題解決型」計画であるとしている。そしていくつかの自治体での先覚的な試みを手掛かりとして、様々な「まちづくり手法」が誕生した時代であるとしている。

55年以降、1980年代に入ると国際化・情報化というキーワードが頻繁に使用され、昭和58年の中曽根内閣による規制緩和や内需拡大要請などを背景として、東京を中心として事務所需要の急増、インナー・エリア問題発生懸念、アーバン・デザインの市民権獲得であり、この計画を「都市構造再編型あるいはイメージ活性化型」計画の時代としている。

私は、更にこれに付け加えるなら、20世紀最後の都市計画の主要なテーマは、21世紀に向け40年代に形成された無秩序で粗雑な市街地形成の再整理と大都市圏での土地問題・住宅供給に加えて、1年の4割を超える自由時間に対応した都市形成であり、遊・創・美・感、等といったコンセプトの基に都市の再編成がなされる「自由時間型」計画であると考えます。

今日、都市の外側で活発に行なわれているリゾート開発は、自由時間の一部に対応するものでしかなく、また、マスコミに躍らされる一部の若年層等、特定階級に対応する空間である。更に、今日のゴールデン・ウィークに見られるように、平日以上に渋滞する交通状況は、レクリエーション需要に応える交通網・交通手段が形成しておらず、自ら都市内、それも居住地部分での余暇需要を受け止める空間を用意する必要がある。

自由時間に対応したまちづくり・都市形成を進めるためには、都市の魅力をできるかぎり引き出すことが必要であり、都市景観は、これからの大きな計画テーマとなる。また、公共施設の整備にあたっては、現在の延長線上でつくるのではなく、新たな社会への対応という新しい系を必要とする。

2. 都市景観行政の20年の実績

この20年間程の実績を踏まえて、都市景観行政の効用・効果を整理すると、概ね3つ程の事項に整理することが出来る。

一つには、**都市計画制度の総合化、都市計画と建築設計との近接・連携**である。

多くの都市で試みられているように、都市景観や都市デザインの一つに、道路と公園、道路と宅地、宅地と宅地の境界部分のデザイン化がある。これは、これまで行政運営である道路は道路担当、河川は河川担当という縦割り行政ではうまくいかず、行政制度の総合化、都市空間の融合化を必要とした。

都市計画行政の総合化や都市空間の融合化とは、例えば、都市計画道路の整備や河川改修事業に際して、沿道や河川沿いの町並みのあり方やそこでの地域住民の利用・活動形態を想定しながら事業が展開されることになる。更に、整備された沿道や河川沿いの風景や建築デザインを整え、あるべき町並みを実現するためには、建築デザインや建築位置を誘導するなどの施策を講じる必要があり、



新宿西口中央通り(新宿区)
植樹密度が狭く、緑陰の濃い街路樹
戦災復興都市計画で整備された都市計画道路と同程度の街路形態を示す



新宿四季の道(新宿区)
都電敷きを利用し、都心部に深い緑を生み出している

都市計画行政と建築行政との連携を必然的なものとした。

同時に、都市計画制度そのものも、これまでの予定調和型都市計画行政から、あるべき街の姿を実現するためのプロジェクト型都市計画行政へと変容してきた。

二つめには、**社会政策のデザイン化・住民参加**である。地域の個性的・伝統的な風景・景観や道路境界線の民地部分等は、地域住民の共有財産であると認識されるなど、都市デザインに、地域住民も積極的に参加している。

これまでの経験から、行政担当やプランナーだけで理想像を描いてもやろうとしても、うまくいかない場合が多く、先進地においては住民の参画をいろいろ工夫して進められている。このことがまた、住民の生活にある種の活力を与え、また、

地域の経済的な活力を刺激するという事実もある。

特に、経済的地盤沈下を起こしている地域や商店街などでは、都市景観整備と併せてさまざまなイベントを展開するなど、都市景観や都市デザインが地域の活性化の主要な手法の一つとなっている。

三つめが、**産業振興としての効果**である。

掛川での木レンガや栃木県巴波川の瓦タイル舗装は、都市デザインと併せて、林業や窯業等地場産業の活性化をねらったものである。都市景観や都市デザイン化は、その都市・地域の風土の特徴をだすことが良いとする考え方がある。そうすると当然のことながら素材として地場の材料を用いることが必然的に多くなり、地場産業への相当な影響を及ぼすことになる。

更に、材料だけでなく、都市デザインを進めるためには、ディテールの部分において手仕事が必要であり、石工さんや庭師さんなど、職人さんが必要である。

高度成長期の過程のなかで優秀な職人さんが極端に少なくなったが、先進地においては、こうした技術集団を組織化し、地域の活性化を図り、且つ魅力的な地域経営を展開している。

一方、盛り場や魅力的なレストラン、コーヒーショップ、ブティック等も都市景観上重要な要素であり、良好な都市デザインを施した場所には、こうした施設が立地し、都市の持っているバザールの性格や劇場的な性格を生み出し、魅力的な空間を形成している。

従来、産業振興は、産業政策の点から検討されていたが、都市の魅力向上は、高度なサービス産業、先端技術産業の立地誘導の点からも重要であると言われている。

また、横浜市などの先進地にみられるように、歩道への絵タイルを設置する際の歩行者の安全性の確保のために新たなタイル製品開発（特許を取った）や都市のデザイン化を進めるためのデザイナー集団の育成など、都市デザイン産業の育成などの効果もみられ、都市景観は、さまざまな産業を育成することとなった。

3. 都市景観の構成と方法 (都市景観の構成)

各地の事例から、どの様な景観要素を対象としているかについてみたものが都市景観形成の枠組



古川親水公園(江戸川区)
農業用水を整備し、地域住民に開放した例
岡山西川緑道とともに、水辺空間の新しい活用方法を提示した



お鷹の道(東京都分寺市)
湧水を生かし、地域住民の憩いの場として利用されている小緑地
新たに造りだすとすると、古川親水公園のように何十億円もの事業費を要する

である。縦軸に景観対象要素、横軸に保全・修復・新設(活用)等の整備手法に区分し、各地区の事例に強引に振り分けてみた。多くの事例は、多様な景観要素を含みつつ保全手法から活用まで複合的・多面的に展開されているのが実態である。

表に示すように、景観対象要素としては、河川・池、林・森等の自然的対象物は、保全あるいは若干手を加えた修復的活用事例が多い。

町並み整備については、保全、修復的事例が多いが、その中であっても、実際には建物の移築、町並みにあった建物の新設等の手法を施される例が多く、保全なのか、新設(活用)なのか、その区分けが定かでない。しかし、成功している多くの場合、過去に形成された町並み形態(特に屋根・スカイライン)、宅地形状、建物の壁面の周辺との調和、色彩などを街づくりのデザインコンセプト

トとしながら、古い建物を保存・修復しながら進めている例が多い。

用水・河川を活用した緑道整備、あるいは歩行者専用道路整備事業は、補助事業が異なることになるため、表に記載した分類が異なるものの、利用形態としては、歩行者空間の整備・拡大するための都市デザイン事例が多い。

事例からみる都市景観の整備内容は、それほど多くのデザイン・アイテムをもつものではない。特に、歩行者専用道等の整備については、補助単価、整備手法が整いすぎてデザインに工夫がみられる事例が少ない。一方、町並み整備や河川を活用した親水公園などでは、整備目標が同じとしても、形態、歴史的経緯が大きく異なるため、さまざまなデザインの工夫を見ることが多い。特に、さまざまな主体が関わるほど、魅力的な都市景観が形成される。

こうした都市デザイン・都市景観整備に関する事業は、繰返し事業が展開される他、ゲリラ的・点的に事業化された区域を中心に、その周辺地区へ拡大し、更に、地域全体への都市デザインのネットワーク化として展開されている。同時に、事業を担保するための条例の制定など、法制度が整えられる例が多い。

(都市デザイン・都市景観の整備手法)

都市景観・都市デザインの整備内容としては、安全で快適な歩行者空間の整備、水辺空間の活用、地域の伝統的・歴史的資産の保護、文化的資産を増す、街の形態・視覚的美しさを増す等、各地域でさまざまな目標がある。

整備方法として、行政自らの建設事業による都市デザイン活動や民間建築物の誘導的手法による都市デザインがあるが、いずれにしても特定部局だけでは成功がおぼつかなく、行政全体としての取り組みが必要である。

また、一時的にとりまとめた内容に縛られる必要もなく、都市・地域の成長・変化に合わせて組織、内容を逸脱することも必要である。

先進地における都市景観の進め方、組織のあり方をみると、始動期においては多くの地域においてモデル地区でまず事業が展開され、住民に計画・事業が容認されてから、次に地域全体へと計画が展開されている。

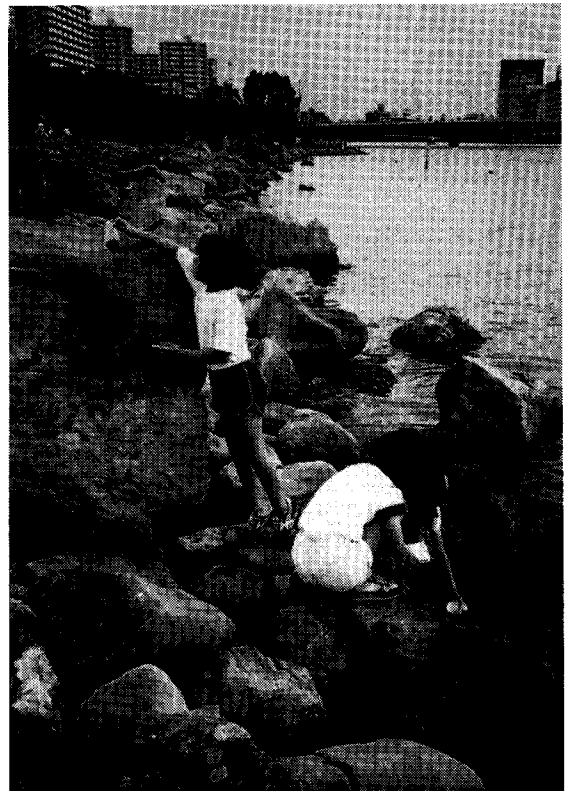
その際の組織としては、担当する部局と地域住民・商店街等の団体とから構成される都市景観整



巴波川ふるさと景観整備事業(栃木県栃木市)

倉と川による街並み

地場産業である窯業を都市整備に生かし、地域の活性化に努めた



八潮ニュータウンの海岸護岸(品川区)

自然石による護岸、蟹等が棲息し、子供の格好の遊び場になっている

備委員会等を設置する例が多い。

こうした経験を踏み、次に、都市景観担当部局と都市景観懇談会や都市景観審議会等が設置され、都市景観基本計画、都市景観整備地区の指定等を

都市景観形成の枠組

事例からみる都市景観形成の要素・枠組

* これまでの各地における実績から作成

都市景観形成の要素区分		保 全	修 復	新 設 (活用)
自然	河川・池	玉川上水保全 / 東京都多摩	市川市真々川桜堤防の保全	
	林・森	各地の市民の森保全 樹木保全指定 都市近郊緑地保全 風致地区開発行為規制要綱 / 横浜市 (S47)		
	畑	生産緑地指定 / 建設省 (H4 改正)	市民農園	
建物	建 物	大通り公園初小緑化ゾーン / 札幌市 (S56) 明るいまつりライトアップ / 大津市 (S61) 社の都を未来に生かす風情まつりライトアップ / 仙台市 (S61) 広島観光ライトアップ / 広島市 (S62) 横浜市夜の景観的魅力度向上ライトアップ / 横浜市 (H1) 地域個性形成事業歴史的建築物等活用 型再開発事業・まちづくり再開発事業 / 建設省 (H1)		市街地環境設計制度 / 横浜 (S48) 新宿三井ビル・公開空地 / 新宿区 (S49) 建築文化賞 / 神戸市 (S49) 六番池住宅 / 水戸市 (S50) わび・こけし / 伊 (S53) 各護市庁舎 / 各護市 (S56) 新宿N.S.ビル・内部空間 / (S57) 御木ノ水スクエアー / 千代田区 (S62) 運賃使船保存庫 / 広島県倉橋町 (H2)
	町 並	妻籠の町並保全 / 本曾 (S45) 文化財保護法改正 (伝統的建築物群保 存地区) / 文化庁 (S50) 伝統的建築物群保存地区指定 / 金沢・高山市等 (S52) 伝統的建築物群保存地区指定 / 津和野町 (S53) 有松地区歴史的町並保全 / 名古屋市 (S59) 四間道地区歴史的町並保存地区指定 / 名古屋市 (S61) とおの昔話村 / 遠野市 (S61)	ばん阿寺周辺地区整備 / 足利市 (S57) 神大寺仲店修景計画 / 御布市 (S60) 町並保全 / 長野県小布施町 (S63) ペリーロード整備事業 / 下田市 (H2)	
土木	公園・広場		都市公園等整備緊急措置法 / (S51) 広場公園 / 建設省 (S56) 街角の酒い列ゾーン / 盛岡市 (S60) 三笠公園通り修景整備 / 横須賀市 (S62)	楠根川緑陰歩道 / 大阪市 (S50) 天神遊歩道 / 福岡市 (S51) 開港公園 / 横浜市 (S57)
	道 路	日本の道100 選 / 建設省 (S62)	わん167 実験開始 / ハク市、チカト市 (S45) 都心プロムナード / 横浜市 (S50) 列ゾーン作戦 / 鹿児島市 (S52) 山口パークロード / 山口市 (S55) フラワロード / 神戸市 (S56) ツノロード 整備事業 / 建設省 (S59) 紺屋町シンボルロード / 徳島市 (S60)	平和買物道路 / 旭川市 (S47) 緑と彫刻の道路 / 神戸市 (S48) 新宿四季の道 / 新宿区 (S49) ミュージアム道路 / 建設省 (S54) 地下鉄御代駅市民列 / 京都市 (S56) 綾瀬ミュージアム道路 / 足立区 (S57)
	橋 梁	中島川石橋群橋梁災害復旧 / 長崎 横浜市ベリテラテラ	中の橋高橋 / 盛岡	豊田川X橋 宝塚大橋 / 宝塚市 (S53)
	用水・河川・運河	小樽運河を守る会 / 小樽市 (S48)	古川親水緑道 / 江戸川区 (S48) 道頓堀サテッド / 大阪市 (S50) 西川緑道 / 岡山市 (S61) 大田川左岸環境整備 / 広島市 (S55) 小松川南川親水公園 / 江戸川区 (S59) 横十間川親水公園 / 江東区 (S60) 音無川河川環境整備 / 北区 (S60) 巴波川ふるさと景観整備 / 栃木市 (S61) 乙女川魚楽護岸整備事業 / 岡崎市 (S61) 用賀カステルロード / 世田谷区 (S61) 釜川河川整備 / 宇都宮市 (S63)	
	海岸・海浜	自然海岸の 保全	お台場海浜公園 / 東京都 (S61) 赤穂海浜公園 / 赤穂市 (S62)	海釣り公園 / 神戸市 (S51)
産業	商店街		吉祥寺サンロード / 武蔵野市 (S45) 伊勢佐木町歩行者天国 / 横浜市 (S45) 馬車道モール / 横浜市 (S52) ジョックパーク一番町 / 仙台市 (S54) 呉レング通り / 呉市 (S54)	
	業務・産業 農 業 遊園地・テーマパーク			タナカ / 新宿区 (S55) パークシティ新川崎 / 川崎市 (S63) 長崎オランダ村 / (S58) 2人商業開発 / 池田市 (S58) ワイン城 / 神戸市 (S59) 鶴西海海水族園 / 東京都 (H1) 養殖メッセ / 千葉県 (H1) 陶芸メッセ / 益子 / 益子町 (H2)

* 各地での実績を強引に景観形成要素区分に振り分けた。実際には、各地での事例はさまざまな要素を組み合わせ、複合化されて展開している。

盛り込んだ「都市景観条例」の制定等へと展開しているのが一般的である。

都市景観基本計画の内容の多くは、地域全体を対象として、点・線・面の3つの階層的構造をもつことが多い。

点は、都市景観上のまとまりをもつ地域区分が行なわれ、それぞれの地区の都市景観がイメージ化される。

線は、これら地区を相互にむすびつける河川・道路等の都市景観軸を定め、整備目標が記述され

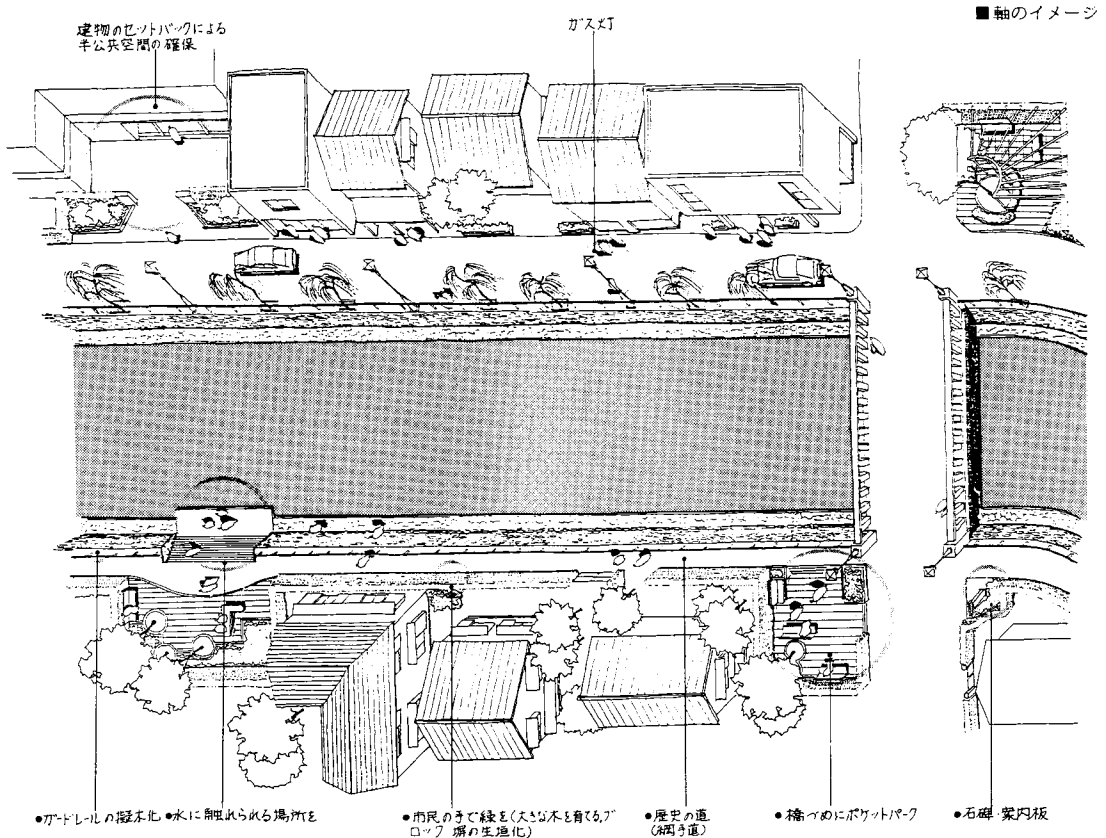
る。

面は、地域、あるいは都市全体の都市景観・都市デザインの目標が述べられ、モデル地区等で展開されてきた景観整備施策を体系的に整理するとともに、条例などに基づく都市景観整備地区の指定対象としての重点地区の選定へと進む。

次頁の表は、都市景観整備を進めるうえで必要な都市デザイン基本計画図書に記述すべき内容を整理したものである。各地域の状況を踏まえて、内容が記述されることが必要である。

栃木県栃木市巴波川ふるさと景観整備計画（昭和60年）

一部完成・現在、川沿いの倉を活用し、音楽祭等の催しものが行われている。



4. 都市景観行政を進めるに当たっての課題

都市景観整備を進めるためには、国の制度や自治体における行政運営も変える必要がある。これまでの経験から、都市景観行政を進めるに当たっての制度、方法等について主要な事項を述べると次のとおりである。

(建設事業制度の改正)

今日の建設事業に関する行政の制度は極めて良く出来ており、設計・建設方法、積算方法(歩掛り)等が非常にきめ細かく決められており、新たなデザイン、新しい材料を使用しようとする、極めてやりにくいのが現実である。

更に、都市景観整備は、その多くが行政が事業主体となることが多いが、役所の発注は単年度主義であるため、時間を掛けて設計を行ったり打ち合わせが出来ないまま、施工さざるを得ないということが多い。

従来標準設計は、極めて効率的ではあるが、都市景観整備や都市デザインを進めるうえで、なじまないことが多く、その改良が必要である。

(一括補助制度の必要性)

都市のアメニティや都市デザインに関連する補助制度は、今日、驚く程の数がある。しかし、その多くが同じような事業内容であり、また小回りの効かない縦割り補助事業である。都市デザイン・都市景観整備事業は、各事業区域の境界線部分のデザイン化が重要であり、補助事業においても事業の融合・総合性が重要である。

このため、栃木県の「誇れるまちづくり事業」や自治省の「リーディング・プロジェクト事業」のような小回りの効く総合補助制度を設ける必要がある。

(ゆるやかな都市景観条例・法制度の制定による都市景観の推進)

都市景観を進めるうえで、建物のファサードや壁面後退等の形態・色彩などの規制誘導が重要である。建物の規制誘導は、建築確認業務に委ねることになるが、建築確認業務は、建築基準法や地区計画等を根拠法としている。しかし、都市景観形成のための拠りどころを地区計画で行なおうとすると、地区計画が極めて難解な内容となり、また、郊外の団地に見られるような弾力性のない非日常的な都市景観を創設することになる。

都市景観を展開するうえで、地区計画や条例では限界があり、その時々に応じた弾力的な確認業

都市景観・都市デザインのための一般的な目次構成と記述すべき内容

1. 都市デザイン・都市景観整備の目的
 - * 当該都市・地域において都市デザイン・都市景観整備の必要性について記述
 2. 都市・地区の課題
 - * 住民生活、産業、交通、環境、歴史等に関する事項の整理
 3. 地域の優れた都市景観・都市デザイン要素の抽出(S: 1/2,500~1/10,000)
 - * 優れた場所、地域を特徴づける要素を抽出し、マップ化する
 4. 都市デザイン・都市景観整備の理念
 - * 1. 2. 3. 4を踏まえて、地域のあるべき物的空間、住民の生活スタイル・産業活動等を記述
 5. 都市景観・都市デザイン・マスタープランの作成(S: 1/10,000)
 - * 整備すべき位置・地区、整備内容、都市景観・都市デザイン構成
 6. 重点整備地区・モデル地区の計画作成(S: 1/500~1/2,500)
 - * 計画の熟度、緊急度、住民参加の可能性、事業の効果等から、重点的に整備すべき地区の抽出
 - * 整備内容、事業費、手法等を立案
 7. 事業スケジュール
 - * 整備時期(短期、中期、長期の区分)
 8. 住民参加・PR活動
 - * 住民参加方法、PR手法について記述
- # 記述内容は、一般の住民が理解できる言葉で記述することが重要である
このため、パース、写真等を活用することも必要
- # 計画作成過程から、住民と行政、コンサルタントとの共同作業が計画を実現するうえで重要
- # 建物誘導による都市景観・都市デザインを進めていくためには、条例などの法的担保が必要不可欠であるほか、都市計画との連携が重要
- # 都市景観委員会などを設置することも必要

務が必要である。そのためには、建築主事の都市景観に対する理解を深めるとともに、社会、とりわけ建築設計に携わる人々の協力が必要であると同時に、今後、デザインガイド等のゆるやかな都市景観条例・法制度を制定する必要がある。

(コンサルタントの活用)

都市デザインや都市景観事業において、都市デザイン化のシステムは、その多くが委員会方式によって行われることが多い。委員会への提出資料の作成は、その多くがコンサルタントによって作成される。しかし、コンサルタントが委員会の前に出て意見を述べる事が出来るケースは、徐々に増してはいるが稀であり、多くが行政の下請けの利用となっている。

優れた都市デザインを進めるためには、専門家としてのコンサルタントの能力を活用することと併せて、先にも述べた様に、新たな産業施策としてのソフト産業であるコンサルタントの育成もまた重要である。

(都市デザイナーの育成)

幕張新都心や横浜MM21等の大規模開発では、様々な都市デザインが試みられている。しかし、既成市街地での都市景観整備は、様々な主体間の調整であり、都市デザインも調整作業であり、整備内容の決定は、委員会での多数決や都市デザイナー、コンサルタントのこれまでの経験や好みから決まることが多い。しかし、都市デザイン案は、必ずしも確信をもって提示しているわけではない。

都市デザインは、造園、土木、建築、都市計画などの様々な分野からアプローチしてはいるが、相互の理解が十分とは言えず、今後、学際的な領域を含めて専門家としての都市デザイナーを育成することが重要である。

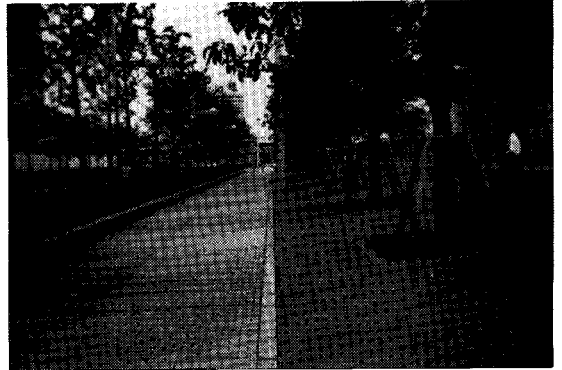
今後の都市景観行政のあり方について

最後に、現在の都市景観・都市デザインをみたり、これまでの経験から、幾つかの感じた点について列挙したい。

今日の都市は、大都市ばかりでなく地方都市においても、過密市街地の様相を示す。

これまでの都市建設は、鉄道用地や神社の境内、お堀等の過去のストックの空気を食い潰しながら行ってきたと言える。

都市デザイン・都市景観整備は、街角の小さなスポット空間をデザイン化する等の行為も大きな



幕張新都心センター地区の歩道とセット・バックした敷地(千葉市)
同じレベルで整備された歩道と敷地
同一のデザインで路面を仕上げるとどうなるか



幕張新都心住宅地
ヨーロッパ等の街並景観を尊重したデザイン・ガイドに沿った各デベロッパーによる計画案をデザイン面から検討するスタディ模型(1/500)平成7年度入居予定。

デザイン手法の一つであるが、しかし、こうした行為は、更に過密市街地を形成することにもつながる。自由な空間を確保することは、現在のまちづくりの中で重要であり、公園整備において何もない原っぱを希望するものもこうした表現の表われであると考えられる。都市の「空き」と都市デザインの調和は、これからのまちづくりにおいて重要なテーマであり、デザインをしないということも必要である。

特に、夥しい道路占用物等の除去・整理・適切な管理が都市デザインを進めるうえで効果的である。

また、過剰な都市デザイン、表現しすぎたデザインも多く見られる。何もしない浸透性の黒いアスファルト舗装が、極めて新鮮であると感じるこ

とも多い。

道路等の公共空間は、本来なら沿道の建物に対するサービスを目的とするものであり、安普請のデザインよりは半永久的なものとして整備すべきものである。新宿駅西口から郵便局を抜け工学院大学に至るランチロードとか言う名称の道路のように、商業施設に負けない色彩、デザインを施したのもあり、安キャバレーと見間違えるのは、私だけではないであろう。ストックとしての都市景観の視点が極めて乏しい。

更に、都市デザインにあたって、特に、若者の消費に迎合したまちづくり・都市デザインが志向されているように思われる。日本経済を支えている大人が、赤ちょうちんだけでしか文化やアメニティを享受できないのは、極めて寂しい。ガキンチョから本物志向、若者にとっての生活スタイルの規範となる大人のための景観づくり・まちづくりを志向すべきである。

都市のアメニ整備のための社会投資は、商業・業務空間等の都市の中心部等で行われ、居住地部分での都市デザイン・アメニティ事業は、極めて僅かである。

本来なら、文化は、自由な時間、自由な空間である居住地部分で展開されることが基本である。

今後、住宅地部分での都市デザイン・都市景観整備事業を展開する必要がある。

上記とも関連するが、解を見出すことが極めて困難であるが、地価を下げるのが都市デザインを進めるうえで有効である。現在のような高騰した地価では、土地取得に大半の金が掛かり、上物に充てる費用は極めて僅かである。仮に、この比率が逆転すると、建設費に大きな費用を割くことが可能になり、日本における町並みは極めて良好なものとなろう。

最後になるが、何もしないが、愛される風景、好まれる場所が各地に点在している。こうした風景、場所が地域住民の知らぬまに、撤去、改変される例が余りにも多い。優れた場所、好まれる風景を大事に、静かに保存することが、都市デザインを進めるうえで最も必要な施策であると思えるのも、今日のデザイン行政である。

略歴

昭和44年	工学院大学建築学科卒
昭和46年	工学院大学大学院修了
昭和52年	(株)地域計画総合研究所設立 同研究所代表取締役現在にいたる

建築設備実験室の移り変わり

建築学科助手 高 信 碩 文

本年（平成3年）の卒業式を向えるや否やニッチの原稿をお願い致しますとのお話があり、題材、スタイル何んでも自由とのことでした。お受け致しましたものあつという間に12月、これは大変、何を書いたら良いものや、困り申した。本学にとって大きな出来事として新宿、八王子の再開発により校舎新築がありましたので、その中の小さな一部である建築設備室（但、建築学科の一部の室のことなので知らない人もいます）の移り変わりについて書いてみますが、八王子移設の折に古い資料等を簡単に処分してしまったことを今に後悔しています。

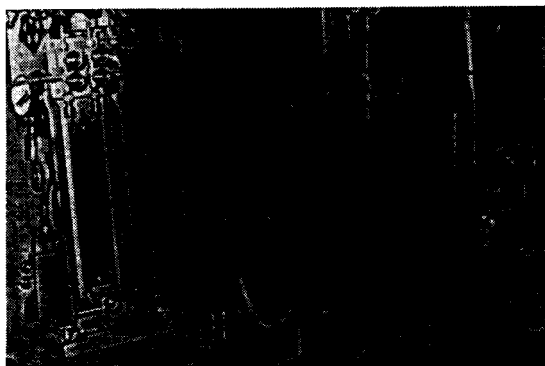
足立先生にずいぶん昔のことを聞いて見ましたところ、昭和36年4月に建築学科内に設備工学コースが新設され、当コースには是非空調設備実践装置を作り実験実習をさせる必要ありと考えられ、保岡、平岡、足立先生等を中心に昭和38年頃に建築設備実験室及び実験装置が作られたとのこと。実験室の位置は新館と旧館に囲まれた地下の中庭にあり、そこに屋根を作り床をコンクリート打ちにし、境界壁をまわりの建物の外壁と共有にした構成であった、以上のように完全に独立したものでなかったため戸閉まりをしても簡単に回りの建物から侵入できる室であった。

この実験室内に中島(康)研究室が昭和39年～44年9月まで、45年4月～46年12月まで水野研究室がありました。

その後上層階に研究室が移られたため、実験室には外来講師の先生方と、桜井助手、柿沼補手が居られました。そして50年頃に桜井さんの後任として私が入りその間に実験システムが昭和50年代と昭和60年代と作り変えられているので、当時を思い出していろいろと出来事を書いてみます。

ともあれ初代の実験室の写真があればと思い、中島研の卒論を見させていただきましたところ、蓄熱槽、冷凍機、冷却器の写真がありましたので懐かしきものとしてながめて下さい。当時のお話等を中島先生よりお聞きして載せられればと思

ましたが、先生は多忙なため、40年代前半学生であった大橋先生に思い出話を聞いてみました。



コンデンスユニット(初代空調システム内)



冷却器(初代空調システム内)

『卒業研究に実験室の冷熱源装置を利用して蓄熱槽の実測等を行いました。そのときの思い出は実験等より毎日、氷屋へ行って1貫目の氷を買ってその氷をカンナで削ってかき氷として食べたことが懐しいと言っていました。』なかなかかき氷の器械が手に入らなかった時代とのこと。当時の熱電温度計は0接点補償装置が必要なため氷が必要なのですが残る氷の方が多いので、かき氷とかオンザロックになったのであると思います。

その他に新田さん（晩建設）にも当時のお話の

原稿をいただきましたので以下に載せていただきます。

『設備実験は当時は必修科目でした。(現在は選択科目) ガリ版テキストで、風速、温湿度、グローブ温度等と数回測定のうち、データ処理して、レポート提出という型で行ってありました。私にとっては卒業後20年以上になりますが設備実験は実

務に直接そのまま役立った実験授業であったため今だ昔の記録が残っており、あの薄暗い地下実験室は、そこで実習した人々にとって私と同じような思い出のあるところである。』

と言ったように実験室及システムは卒業研究や授業実験として使われた。

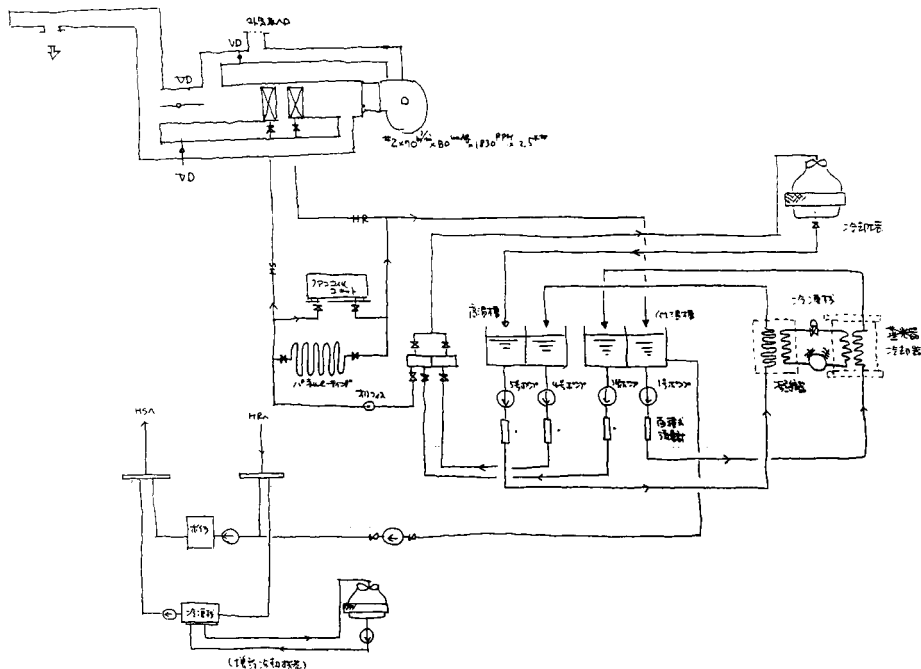


図-1 初代実験系統図(068)

そのように使われた初代の空調実験装置(図-1)の一部である冷凍システムはコンデンシングユニットとしてまとめられており、膨脹弁の霜、コンプレッサの音などは幼き頃の魚屋を思いおこすものでした。この冷凍システムは機器そのものがよく見え教材用としては充分役目を果たした物だと思います。

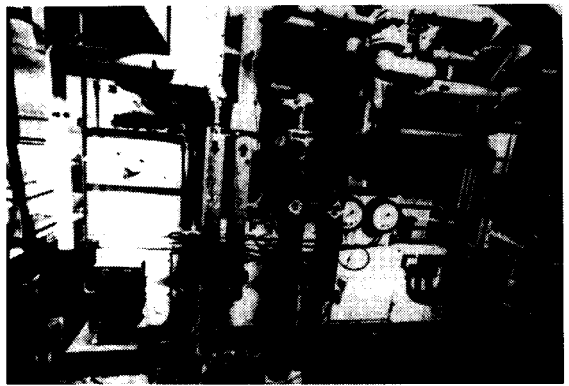
空調器まわりについて思いおこせば、加熱コイル、冷水コイル、バイパス回路、仕切板の風止めが納められたもので、無段変速ファンで送風するダクトシステムとなっており(手作りの様です)送風機、ダクト装置に関する実験にも使われていました。その装置による逸話があります。前々から先生方も測定値がおかしいと思いながら毎年、実験を行っていました。前実験補手の柿沼君が訪ねて来たときに新しいシステムの計画案が決定し

たので壊れてもかまわないから原因を調べてみようということではじめたら何やら送風機の回転方向が逆になっているように見えるため(当時の検査は?) モーターの結線を変えてみました。そうしたら勢いよく風が吹出し、過去10何年間の埃を出して、まわりが見えなくなるくらいすごい状態になった記憶があります。こうして1回をまともな状態で実験されることなく当ダクト装置はとり壊されました。

その他、当時の温度計測には熱電記録温度計(ER)を標準温度計にて補正して使っていたが紙づまりが多く、零ポイントが変更できないので何点も重さなったりして読み取りにかなり苦勞した40年代で社会的な動きでは、公害問題の深刻化と後半の第一次オイルショックの時代です。



第2代実験システム(工事中)



第2代実験システム(空調機まわり)

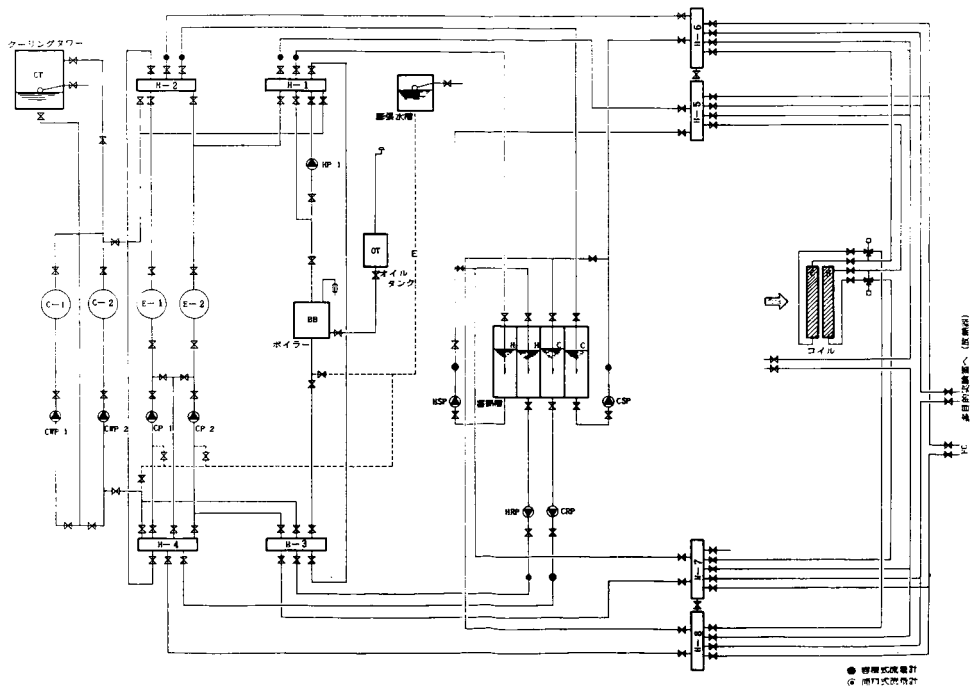


図-2 第2代設備実験室(068)実験装置系統図

53年12月には初代システムが取り壊され建屋はそのままにして第2代目の実験システム(図-2)が54年3月に完成した(施工、新日本空調)。

その中には初代システムには装備されていなかった多目的試験室を設けた。(但し規準面積まではとれなかった)この室は実験説明時及び各種実験、その他放熱器の試験室として充分使われたが、所詮内装工事なだけに雨もりは相変わらずあり大切な計測材等を濡してしまったり大雨が降ると地下の排水があふれ水深10cm位となり長靴をはかないと

入れなかった等の思い出があります。いずれにしても第2代の実験システムは多種多様な実験を考慮したので複雑なシステムに設計されなおかつ最新計測機及計測システムを取り入れられて学生にとっては現時点の機器、システム性能、空調設備の構成など直接確認できたと思います。又計測システムでは各系統に各種流量計、温度センサー、オリフィス等を設けデジタル熱電温度記録計(デジタルプリンター)で一括処理方法とした。

この時期頃よりコンピューターによる測定が行

なわれはじめたがそこまでは及びませんでした。各種の実験においてはスペース、負荷、季節等の問題及び、実験時間の制約がありてなかなかデータがうまく取れなかったことは前代のシステム同様レポートをまとめる学生にとっては苦勞したことです。

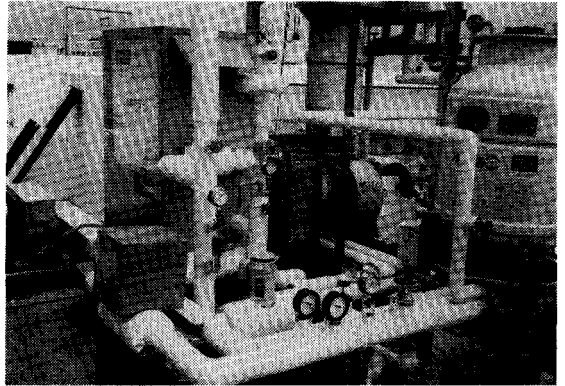
しかし学生時代にこのような実験システムを使い、多種計測機器を直接手にしたことは後々役立ったことと思いますが……。当時中島(康)先生はこのような実験装置は他大学にはないのでよく学んで欲しいと実験時によく話されていた。その他第2代システム工事と時を同じくして高温水暖房システムが作られその装置で水野研の卒論生が真夏の暑いときに放熱器性能試験に使用された。(その装置は圧力を10kgもかけるので怖いなと思いつながら居た)。そして平成元年には新宿校舎が超高層大学になり実験関係設備はすべて八王子校舎移転と決まり当実験システム及び実験室が移設することになるわけですが予算の都合上、スペース上、従来のシステムの完全移設はできず一部を八王子プレファブ校舎(B2)に移設した。



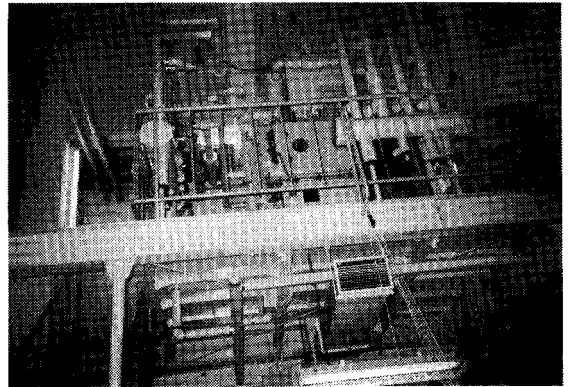
八王子に移設した空調システム(BII教室)

その後11号館(八王子校舎)153室に第3代システムという新時代対応の実験装置と計測システムが作られた。(図-3)(施工晩建設)。これは環境試験室を完全独立させると同時に外気条件調整室を作ることにより、いつでも冷暖房実験が行えるようになっている。特に環境試験室内では従来の実験の他温熱環境と暖冷房に関する実験温度、気流分布の解明、温熱、音環境の評価、空調システムによる環境評価等の実験を行なうよう計画されている。又計測方法は、各測定データをすべてデータロガーに収集させパソコンにてデータ処理を

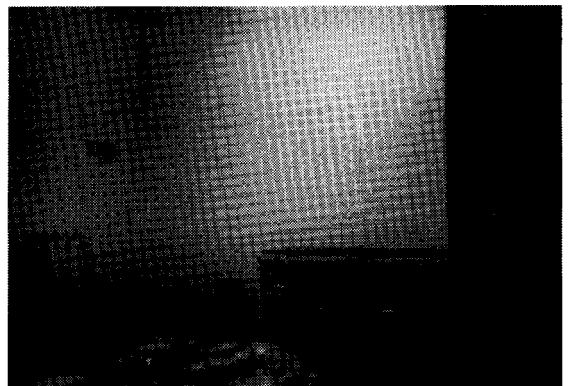
できるようにしている。



八王子 11号館屋上低温空調システム



八王子 第3代空調実験装置(11-153室)



八王子 環境試験室

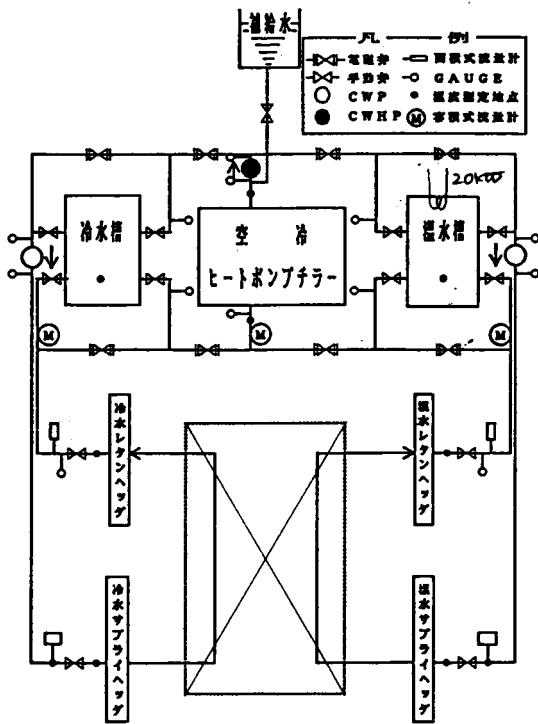


図-3 第3代実験系統図

このようにパソコン計測システムになると測定データが簡単に手元に入るだけで自分で計測システムを確認してどのような方法で、どのように測定計画を立てたらよいか等という現場実測から離れてしまうことについては案づるものがあるが、コンピュータシミュレーションの時代に対応しながら計測技術を向上させることは、エネルギー源の効率のよい制御にもつながるし、又エレクトロニクスを備えた測定装置、計測機にも対応でき望ましい実験装置ができたと思います。(特に最近の計測機は多機能、高性能になり多くの分野で使用され操作が難しくなっています)

以上設備実験室(昭和38年~平成3年の28年間)のうつりかわりについて大雑把に振りかえってみました。

(昭和47年卒業)

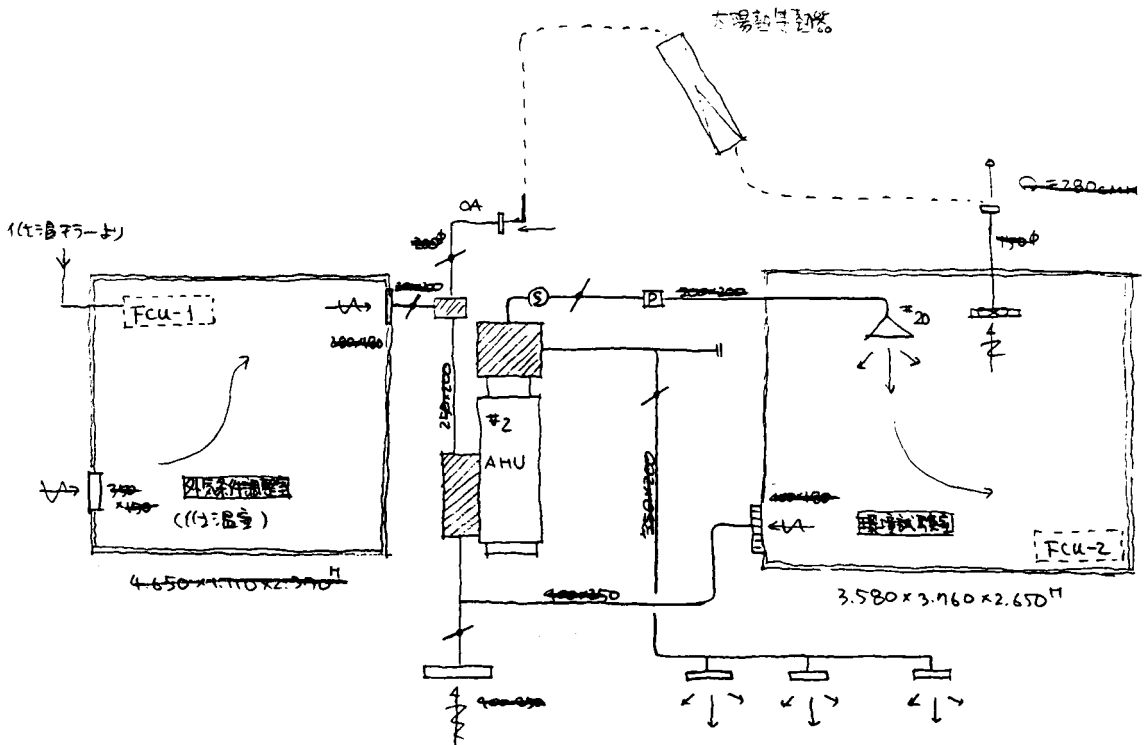
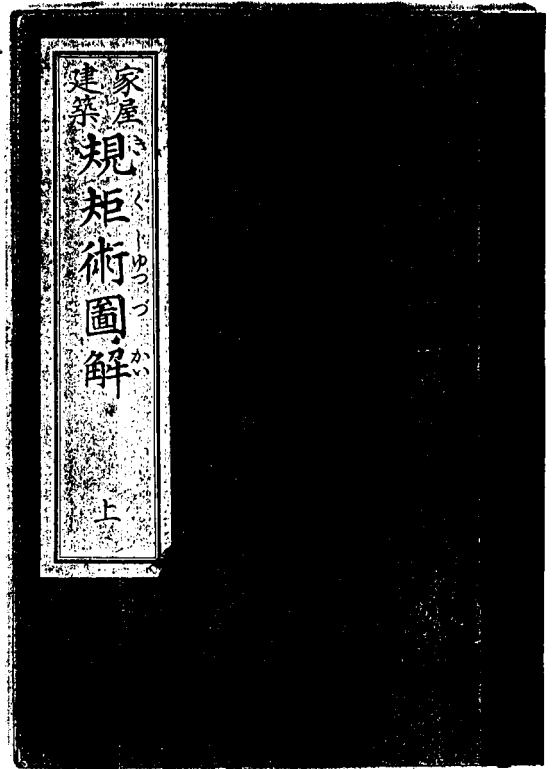


図-3 第3代実験系統図(ダクト)II-153室

大学図書館へ図書の寄贈

本学科昭和5年卒業の吉田義雄氏は平成2年6月に逝去されましたが、故人の遺志により本学図書館に下記の図書がご子息から寄贈されましたので、ご利用下さい。なお、故人は本学校友会文京支部長でありましたし、建築学科同窓会でも活躍しました。また、文京商工会議所や文京区産業連合会の建築顧問などを歴任し、地元の振興に尽しました。

1. 和洋建築軒隅弦法圖解^{のきすゐいとみろづかい}
明治41年8月発行、林美盛堂
2. 日本造庭圖鑑
昭和15年10月、金竜堂出版発行
3. 家屋建築 規矩術圖解上^{きくじゆつづかい}
田中宋榮堂発行
4. 同上、中
5. 同上、下
6. 家屋建築坪曲速成図解上^{つばかねそくせいづかい}
大正2年11月 田中宋榮堂発行
7. 同上、下
8. 藪奇屋 詳細圖譜^{すきやしよさいづふ}
昭和28年10月 彰国社発行
9. 国宝薬師寺東搭立面図 40分の1
10. 国宝薬師寺東搭断面図 40分の1
(岩田 俊二 昭和46年卒)



昭和45年入学生の会開催される

平成3年10月6日(日)午後2時より、昭和45年に工学院大学建築学科に入学したものの会が開催された。南迫同窓会会長を交え久しぶりのなごやかなひとときを過ごした。年令も、そろそろ40代に入ろうとする直前のこととて、みな働き盛りの気分が漲り、在学中まとまりがあった年であったために、皆なつかしさに旧交を暖めあい、次回の集まりを約して散会した。なお同会より11月26日(火)同窓会に2万円の寄附があった。

(南迫哲也、昭和34年卒)



建築コンクールなどの入賞

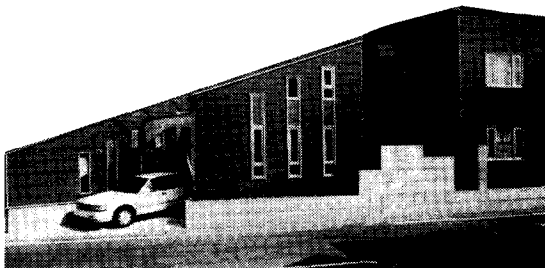
第36回神奈川建築コンクール最優秀賞 「横浜ビジネスパーク」

本学科昭和45年卒業の尾関勝文氏（大林組）が意匠設計を担当し受賞した。



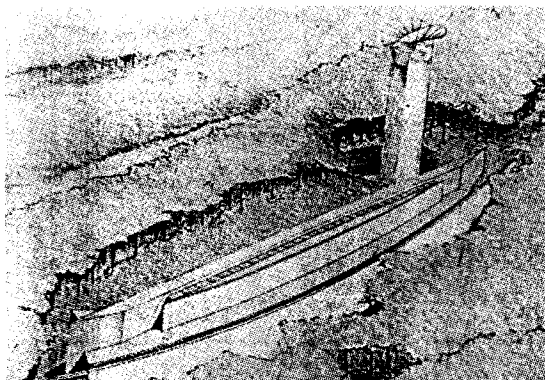
第36回神奈川建築コンクール住宅部門 優秀賞「Oさんの家（大磯町）」

本学科昭和52年卒業の山口明宏氏（マスデザインアソシエイツ）が設計し受賞した。



埼玉県立平和資料館設計コンペ最優秀賞

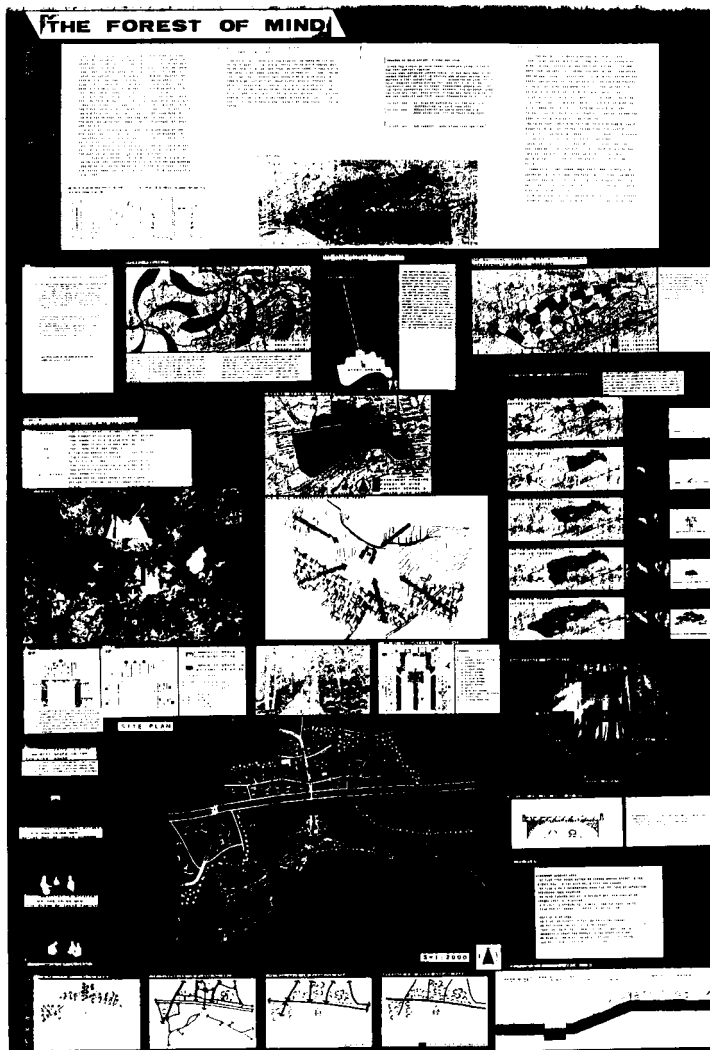
同コンペで本学科昭和49年卒業の伊藤政広氏（交通建築設計事務所）が最優秀賞を受賞した。



IFHP(国際住宅都市計画会議)国際学生コンペに入選

大学院修士1年生全員の共同で「都市の障壁をいかに克服するか」というテーマの標記のコンペに応募し、入選・佳作12点のうち、佳作に入選した。応募案は中嶋教授の指導で多摩ニュータウンの愛宕地区を例とした「The Forest of Mind・心の森」という作品である。

後藤伊落坂	藤谷室伊落坂	哲孝謙一親弘圭	也之郎親弘一	佐野則古本渡	川沢田川野辺	陽雄将川野文	一一子稔寛博
-------	--------	---------	--------	--------	--------	--------	--------



第 25 期 事 業 報 告

1. 同窓会誌「ニッチ」15号 発刊
2. 各クラス、研究室OB会および厚生部会活動援助
3. 名簿の発刊（訂正）
4. 準会員への援助
5. 講演会懇親会等の開催
6. その他（建築学科創設35周年記念祝賀事業協賛による学内連絡会活性化）

第 25 期（1990年）一 般 会 計 報 告

（単位：円）

予 算		決 算	
収 入	支 出	収 入	支 出
1) 前年度繰越金 797,497	1) 会誌発刊費 1,210,000 ① ニッチ№14印刷費 980,000 ② 編集費 200,000 ③ 雑 費 30,000	1) 前年度繰越金 797,497	1) 会誌発刊費 1,200,888 ① ニッチ№14印刷費 979,118 ② 編集費 200,000 ③ 雑 費 21,770
2) 会 費 1,993,000	2) 各部会費 100,000 ① OB通信費 100,000	2) 会 費 2,120,000	2) 各部会費 65,866 ① OB通信費 65,866
3) 総会発送援助費 670,000	3) 同窓会名簿整理費 50,000 ① 整理費 30,000 ② 郵送費 20,000	3) 総会発送援助費 678,640	3) 同窓会名簿整理費 69,657 ① 整理費 51,657 ② 郵送費 18,000
4) 百周年募金運動 援助費 300,000	4) 準会員援助費 0	4) 百周年募金運動 援助費 400,000	4) 準会員援助費 0
5) 雑収入 1,400,000 ① 同窓会名簿売上 200,000 ② ニッチ賛助金 1,200,000	5) 総会費 2,440,000 ① 総会通知印刷費 400,000 ② 総会通知発送費 1,950,000 ③ 懇親会費 60,000 ④ 雑 費 30,000	5) 雑収入 1,235,500 ① 同窓会名簿売上 307,000 ② ニッチ賛助金 928,500	5) 総会費 2,477,059 ① 総会通知印刷費 393,815 ② 総会通知発送費 1,942,956 ③ 懇親会費 33,424 ④ 雑 費 106,864
6) 銀行利息 400,000	6) 百周年募金運動費 334,000 ① 郵送費 134,000 ② 雑 費 200,000	6) 銀行利息 541,252	6) 百周年募金運動費 436,297 ① 郵送費 0 ② 雑 費 436,297
	7) 本部費 40,000		7) 本部費 47,992
	8) 積立金 1,000,000		8) 積立金 0
	9) 予備費 386,497		9) 予備費 0
			10) 次年度繰越金 1,475,130
合 計 5,560,497	合 計 5,560,497	合 計 5,772,889	合 計 5,772,889

第 25 期 (1990年) 運 用 財 産 目 録

(単位：円)

第 25 期 当 初		第 25 期 末	
1) 三井貸付信託元金	9,500,000	1) 三井貸付信託元金	9,500,000
2) 三井貸付信託積立口	85,893	2) 三井貸付信託積立口	593,345
3) 第一勧銀	797,497	3) 第一勧銀	671,801
4) 郵便振替口座	0	4) 郵便振替口座	237,260
5) 現 金	0	5) 現 金	58,617
計	10,383,390	計	11,061,023

11,061,023 - 10,383,390 = 677,633 (増)

第 25 期 (1990年) 財 産 運 用 報 告

(単位：円)

	収 入	支 出	備 考
三 井 信 託	0	0	
三井信託 (積立口)	507,452	0	593,345 - 85,893 = 507,452
第 一 勧 銀	0	125,696	671,801 - 797,497 = -125,696
郵 便 振 替 口 座	237,260	0	
現 金	58,617	0	
計	803,329	125,696	803,329 - 125,696 = 677,633

会計監査報告 平成3年4月11日

帳簿、領収証監査の結果、記載が正確である事を認めます。

建築学科同窓会監査委員 近 藤 龍 哉 ㊤
高 信 碩 文 ㊤

第 26 期 (1991年) 事 業 計 画 (案)

- 同窓会誌「ニッチ」16号発刊
- 各クラス研究会OB会および厚生部会活動の援助
- 名簿の発刊 (本年9月)
- 準会員への援助
- 講演会、懇親会等の開催
- その他 (建築学科創設35周年記念誌の発刊援助及び同事業費の負担による奨学金の確保)

第 26 期 (1991年) 一 般 会 計 予 算 (案)

(単位：円)

収 入		支 出	
1) 前年度繰越金	1,475,130	1) 会誌発刊費	1,230,000
		① ニッチ No.15 印刷費	1,000,000
		② 編 集 費	200,000
		③ 雑 費	30,000
2) 会 費	2,301,000	2) 各 部 会 費	100,000
		① O B 通信費	100,000
3) 総会発送援助費 (校友会より)	690,000	3) 同窓会名簿整理費	80,000
		① 整 理 費	60,000
		② 郵 送 費	20,000
4) 百周年募金運動援助費 (学校法人より)	300,000	4) 準会員援助費	0
5) 雑 収 入	1,450,000	5) 総 会 費	2,580,000
① 同窓会名簿売上	250,000	① 総会通知印刷費	430,000
② ニッチ賛助金	1,200,000	② 総会通知発送費	2,030,000
		③ 懇 親 会 費	60,000
		④ 雑 費	60,000
6) 銀 行 利 息	500,000	6) 百周年募金運動費	300,000
		① 郵 送 費	0
		② 雑 費	300,000
		7) 本 部 費	50,000
		8) 積 立 金	0
		9) 三十五周年記念事業援助費	1,922,003
		10) 予 備 費	454,127
合 計	6,716,130	合 計	6,716,130

工学院大学建築学科同窓会誌「ニッチ」 発刊のための賛助金のお願い(1口:2,000円)

この5年間お願いしてきた、この賛助金は、会計報告にもありますように今年はやや昨年より後退し100万円を突破致しませんでした。しかしいつもまことにありがとうございます。いまや「ニッチ」の発刊を毎年続けるためには欠かせぬ財源となりました。発送費を含めると本会の予算の大半をこの事業に費していることとなりますが、収入源の大半が現役の学生諸君の終身会費(1人7,000円)の納入に頼っているのでは会員は増加の一途でありますので、とても経費はまかないきれないのは理の当然であります。卒業された方々のための事業の大半がこの発刊であることを考えますと、発刊費用分だけでもカバーできればと思っておりますのでご協力下さい。

1986年度実績	(351 口 309人)	総額	702,000円
1987年度実績	(356 口 226人)	総額	712,000円 (ニッチ12号34頁参照)
1988年度実績	(365.5 口 261人)	総額	733,000円 (ニッチ13号36頁参照)
1989年度実績	(529.5 口 298人)	総額	1,059,000円 (ニッチ14号34頁参照)
1990年度実績	(464.25口 268人)	総額	928,500円 (ニッチ15号29頁参照)
1991年度実績	(493.5 口 256人)	総額	987,000円

1991年版同窓会会員名簿の頒布について

一昨年は発刊しませんでした。本年は発刊いたします。
よろしくお申し込み下さいますようお願い申し上げます。

同窓会会員頒布額 5,000円 (含送料)

会員外頒布額 30,000円 (含送料+協力費25,000円)

なお、ニッチの賛助金を同じ振込用紙と一緒に御送金下さって結構ですが、裏面に**名簿代5,000円**と別記して下さいようお願い申し上げます。この記入がないと、全額、ニッチ賛助金とみなされてしまいますので必ず御記入下さいますようお願い申し上げます。

■編集後記

皆様、お変わりありませんか。今年もニッチをお送りします。今号の構成も例年のように、先輩を訪ねてシリーズは板橋塗装の板橋氏をお願いしました。また、記事は岩藤氏の都市デザインについてと設備実験室の高信氏をお願いしました。

私共の編集子は今号限りで交替いたします。長い間のご支援、ご協力ありがとうございました。今後もまたよろしく願いいたします。

これまでに色々の方々に登場いただき多様な記事を送らせていただいたと思っています。建築学科を出ても様々な分野で色々の仕事を行っていることが認識できました。様々な人々にお会いして感じたことは、生意気をいわせていただくと、人々を駆り立て、動かす原動力のようなものを何か認識し、見分ける力を体得することが日進月歩の技術革新の時代にこそ求められているような気がしました。

改めて皆様のご協力に感謝しつつ、ニッチの今後の発展を祈り、編集子の仕事をおわらせていただきます。 (初田、岩田記)

ニッチ VOL.16 平成4年3月19日

発行 工学院大学建築学科同窓会
東京都新宿区西新宿1-24-2
〒163-91 TEL (03)3342-1211 内2025

編集者 初田 亨・岩田 俊二

印刷所 (株)プリントボーイ
東京都中央区湊1-1-15 第5高輪ビル
〒104 TEL (03) 3206-2761

